に係るが故に、必ず其効果を顧るを要す。是に於いて行爲の効果に基づく理想の種別は、行爲の標準に基つく者と共に、甚だ重要なり。

行爲の効果に基づく理想、亦之を三類に大別す。

第一、主我主義。

第二、主他主義。

第三、社會本位主義。[一七]

第一、主我主義。主我主義[一八]は、一切の行爲、悉く自我を主とし、自我を中心とすべしとする理想にして、卽ち利に關するときは自我の利を主とし、功に關するときは自我の功を主とし、乃至凡百の事項に於いて行爲の効果の自我に關する者を主として以て行爲を決すべしと爲す。就中

意味す。
4. Précis 精密的。Vague 曖昧に對し、人間眞個の要求に應じて、事物に具わる精密に到達する意味す。
5. Positive 積極的。Négative 消極的に對し、Détruire 破壞的に反して Organiser 建設的の意味す。主として形而上學的態度の批評的破壞的なるに對す。
6. Relative 相對的。Absolue 絕對的に對し、萬象すべて是れ相關的見地より取扱はるべきの意味す。"Tout est relatif; voilà le seul principe absolu." 是れコムト二十歳の時に擧ぜる格言なり。
眞理を體得するは Prévision rationnelle 合理的先見に造る所以なり。合理的先見致す以て實理的示命を得べし、コムトの所謂 Positive。乃ち見るべし。健は明に東洋從來の正徑に在りとして傳承相繼ぎたる眞理の意義に該當する Positivisme は實理なる思想の脈絡に承相繼ぎたる眞理の意義に該當する Positivisme は實理

主義なり、斷じて所謂「眞體主義」にあらざるなり。

一六　本著第二卷社會理學第一篇第二章第三節

一七　1 Egoism, 2 Altruism, 3 Societism,

一八　或は之を呼びて利己主義といふも、此名目の下に來る觀念は單に自我のみに限らざるが故に、暫く自利と名を利己主義といふ。大凡そ自我を中心とすること、若し此義なり、他人を本位とする者を目して利己主義といふ。又自我を本位とする者を目して他人本位主義といふを妨げず。

利に關する事項、最も頻頻に起り易きを以て、此主義の異名を利己主義といふ。大凡そ自我を中心とすること、若し行爲の標準を自我に求むるに在りとするか、自我を以て認識論的自我に止むる限り、些の差障なきも、自我にして常識の自我なるときは既に差障あるを免れず、況や行爲の効果より見るに於いて、効果の自我に及ぼす者を主とし中心とする理想は、諸種の弊害を見ざる能はず。是等の弊害は何處より發生するか、是れ社會人衆の天然に避く可からざる不平等より生ずるなり。衆多の個人は皆各自我なり、而も此自我にして皆平等ならむか、各個が各個を司配し各個自我の爲に計るは、其効果に於いて亦平等なるべく、些の差障なかるべし。然れども是れ到底在り得べき事實に

あらず、實地の天然的不平等は決して避く可からず。此不平等は、之を大別して二と爲すべし、一には實力の不平等なり、甲を老幼男女の差とし、乙を賦性の厚薄とす、是れ如何にも人間の成立上免る可からざる實力の不平等なり。個人の自個に在る所の實力は平等なりとするも、更に個人の外に存する境遇は、亦人間成立の要素、規定等の千狀萬態によりて平等なるを得ず。[一九] 此二樣の不平等よりして、若し主我主義を以てするときは、實力の不平等は、弱者は斃れ强者は獨り存するを致す。[二〇] 就中老幼男女の差に在りては、强弱は必ずしも恒久の區別ならず、强者亦往往弱者と協合するの要あるを以て、强者の獨存といふも永續を不能とす。賦性の厚薄の差に在りては、弱者全く滅びて强者獨り存するに了る。境遇の不平等は、主我主義によりて、各個人の發達若くは獲得を極めて限られたる範圍に止まらしむるの弊を致す。夫れ不平等は自然的に避く可からざるが故に、主我主義の成立す可からざるは明白なり。

一九　プラトオンの共和國は、殆どオンの共和國の成立及人情的社會の境遇を不平等なるを得ずとなし、此境遇と不平等なるものは、後世所謂擬平等主義の類なり。而して社會亦此に了れり。

二〇　加速度の理法により、强者益强く、弱者益弱く、其極は弱者の斃れざるに至られず、强者存するに止まず。

生存競爭の抽象原理を以て直に人間理想の上に應用し、以て一種の理想と爲すは、卽ち主我主義の一例なり。生存競爭の原理は說明的理法なり、其直に移して以て規範的原理に充つべきは生物學的宇宙を限とす、是れ此宇宙に在りては、他に之を司配すべき更に良好なる機能の發達、意識の完全なる開展なければなり。同じく生物界と雖も、其既に社會學的宇宙に在るや、單純なる生存競爭は規範的原理卽ち理想の原理とならず、變種をば種子による生殖に一任するときは本種に復り、而して壓樹接樹は植物が自ら營み得る者に非ず、庭際の花

卉を生存競爭に一任せば、雜草獨り繁茂して貴重なる花卉は全く絶滅するに至るべし。人間が生物界を改良して自個の所期に叶はしめむが爲には、既に生物の生存競爭に一任す可からず、人間界の經營に於いて獨り之を一任すべしとするの根據は、果して何處に在るか。されば生存競爭は說明的原理の一たるに止まり、決して直に移して以て人間社會に於ける理想を與ふる者と爲す可きに非ず、是れ確認を要す。

二、尙次章自由放任主義の條下に之を詳論すべし。

主我主義にも種種の段階あり、而して此段階は畢竟制限規定の多少に依る。絶對的主我主義は、上の天然的不平等にも拘らず主我を理想とする者なり、相對的主我主義は、主我的以外の動機より發生發達する習慣及本能の規定制限を以てする主我主義なり、而して其究竟は遂に主我たる所以を失ふに及ぶ。

第二、主他主義。　行爲の效果として價値を論定す可きは、他に及ぼす效果是のみ、卽ち一切の事項に於いて皆他のみを顧るを要し、他の利とならざる者は利に非ず、他の功となるに非ざれば功に非ずと謂ふ。此主義の理想とする所は洵に美にして、若し之を實行するを得ば、其效果は善美なる者あるに相違なし。然れども其實行に於けるや則ち極めて大なる困難を存す。蓋し行爲及其動機に、既に他人本位以外なる者あり、今主他主義を取るときは、先づ動機の中他人的動機以外のすべてを鎭壓するを要し、次に行爲に於いても、心中の行爲及身內の行爲は、其效果全く自我に止まるが故に、是れ亦之を除却するを力めざる可からず。然るに、斯く鎭壓を要する動機、及斯く除却を要

する行爲は、是れ其體に於いては人間に必然、其用に於いては人生に必要なるもの、則ち所謂主他主義其者も亦是等の動機と行爲となしには究竟實地の成立を得難き者、卽ち主他主義は自個成立の要素を除却せむと擬する者にして、自個撞着、到底實地の成立を得ざる一の空想に過ぎず。主他主義にも亦種種の段階あり、亦皆制限規定の多少に倚る、其絶對的なる者は是等其主義の實行者たる自我の成立の要素をも除却せむとし、其相對的なる者は是等諸種の範圍内に於いて其主義の實行を期す、其究竟は亦特に主他を以て目すべき所以の者なきに至る。[二三]

第三社會本位主義。　社會本位主義は卽ち斯かる主他主義及主我主義の究竟にして、凡そ行爲の効果は、所謂自

二二　理想には實現といひ主義には實行といふ

二三　Spencer: Basis of Evolutionary Ethics, Chap. X I. XII. Egoism, Altruism 參論し、究竟其調和として同情の發達なる論ぜり。此は道德の要素なり以て完全なる道德の域に進むべし。完全なる以て完全に在りと全幸福(bine vivre)とせり。社會學上氏の定義の道德とは社會に於いて道德の狀態に率ひ、永遠に於いても廣さに於いても社會の人及衆人の完全活動の出來得る樣なる行爲の相表言なる。

二四　從來單に Social といひて、屬性としての社會の意義を內容とせる形容詞あるに止まりしが、新に Social として、實在としての一體として、渾一體としての社會の意義を內容とせる形容詞を生成せり。Paul Carus: The Nature of State

我及他人が體制的に結成せる、社會渾一體に於ける者を以て、其價値を計量せざる可からずと爲す。此主義の示命に據れば、行爲の効果、自我を目的とする者固より不可なり、其他人を目的とする者も亦不可なり、乃ち社會全體に及ぼす効果如何を顧て以て行爲を判斷するを要す。

歐西に在りて社會渾一體の概念、斯學の分野に在りて漸く進むや、新に社會本位を意味し社會渾一體を意味する形容詞を生ずるに至れり、是れ尤も學徒の注意を要する所歐西の學界が、亦予い夙に唱道樹立せる健全なる學風に近づきつゝあるを見るべし。[二四]

社會本位主義の實行の爲には、必ず萬般の行爲が社會に及ぼす効果を知了せむを要し、而して是は社會の研究を基礎とし實理的知識の上に立てる倫理道德の教ふる

所なり。されば社會本位主義は亦實理主義、大觀主義と密に相關係する者とす。

個人的理想に於ける社會本位主義は、斯くして、社會的理想に於ける社會本位主義と密に相關係するに至る、其評說は次章を期す可し。

第五節　人生觀に基つく理想

行爲の標準に基づく理想、及行爲の効果に本づく理想は、共に行爲の決定に直接の前件となる者にして、卽ち本義に於ける理想に恰當す。玆に第三類、人生觀に基づける理想は、人と世界との關係の全體について自個の運命を觀ぜる者にして、直接行爲の決定に與らざれども、亦個人生涯の全體について、隱約の際、大なる効果を成す、されば

之を用ゐるの朝定たるが如し。Social の語根、本體は Socius 所謂社會我にして、其實地上の主義は Socialism なり、Socius の研究者は社會學に於ける所謂心理派なり。

Societal の語根、本體は Society 卽ち社會渾一體にして、其實地上の主義は社會本位主義 Societism なり、Society の研究者は是れ實理的社會學なり。純正健全なる社會學なり。社會本位主義と峻別し、併せて眞の社會學風と社會我の研究學風との區別に注意すべし。

晩近 A. G. Keller : Societal Evolution, 1915 亦斷然 Social の語を斥けて Societal の語を用ゐたり、社會渾一體實理觀が漸く眞摯なる歐西學界にも風を成しつゝあるを察すべし。

行爲に關しては間接の關係に止まれども、同じく個人的理想の一類として之を論述するを要すべし。

人生觀に基づく理想を三類に大別す。

第一、樂天主義。

第二、厭世主義。

第三、進步主義。[1][2][3]

第一、樂天主義。樂天主義は樂天的人生觀より來り、理想は見在を離れて存在することなしと爲し、見在の人生世界は、存し得べき人生世界の最上最美なる者と爲す。是故に此主義は、人間に於いて努力の必要を認むることなく、自然の變遷徑行を以て人生世界の運命と爲す。是れ既に人生を解せざる者。人間現象は行爲を以て成分と爲し、

1 Optimism.
2 Pessimism.
3 Meliorism.

行爲は必ず自然に來らずして人の之をして然らしむるより來る者、自然事項に非すして使然事項なり、此必然の事理よりして理想、實現、見在、さては改革、進歩の論は乃ち生ず。然るに樂天主義は理想は見在の外なることなしと謂ふ、卽ち此主義は亦主義其者を認めざる者にして、到底自存に堪へざる者。但し樂天主義にも亦段階あり、其絶對的なる者は、一切人間の理想及其努力を認めず、全他力宗教の樂天觀、及自由放任說の樂天觀は其尤も著明なるものなり、其相對的なる者は、多少人間の理想及努力を認め、其制限規定の範圍内に於いて樂天主義を取る、其例は多くの自力宗教の樂天觀に見る可し。相對の極限は、所謂人事を盡して天命を待つもの、玆に至りて始めて樂天の名

本來の意義に於ける樂天主義とは、之を命ずるに謂ふ所の樂天主義にして、世間に過ぎざる者、唯だ高尚なる意義のみ。用語を暫く從來の慣例に踏襲するのみ。

二六

目に恰當す、而して其本來の意義を失す。二六

第二、厭世主義。　厭世主義は厭世的人生觀より來る。謂へらく、人の理想は到底完全に其實現を見ることなし、完全なる人生世界は見在に於いては存立すること能はず、見在の世界は到底惡き世界たるを免れず、されば吾人若し眞個に理想に近づかむことを求むるか、せめては此世界を厭離するの一法あるのみ、此世を厭離して更に卽く所の世界の如何なる世界なるかは超絶的疑問に屬するも、此惡き世界を厭離するは、直に是れ惡を去る者なればなりと。厭世主義は斯かる人世觀に基づき、行爲の司配に關係し得る場合には每に此理想より判斷を下さむとす。今若し此主義を最も忠實に、卽ち最も極端に、實行せむと

せば、自殺の一法あり、若し又此主義に主他主義を加味せば、成るべく多くの人を殺すの一策あるに至る。[二七]極端なる厭世主義は斯の如く狂暴に似たれども、其根本義に至りては強ひて排斥すべからざる者あり。夫れ理想は見在と異なるに於いて存在す、理想は實現を豫想し、實現は改革を豫想す。されば見在の人生世界が永遠に理想に合するの期なきは事實にして、厭世主義者が最も鋭敏に感知了認する所。然れども少しく精密に考察すれば、今の理想は明の理想に非ず、昨の理想は既に今の見在なること、是れ史蹟の明證する所に非ずや。科學應用の新發見は吾人の昨今經驗する所、乃ち人生世界が永久に理想と見在との合一を見るの期なきも、漸次に見在が理想の跡を追うて

二七　耶蘇教の經典が傳ふる「アの洪水は即ち神が此他主的厭世主義を實行せるなり。」

走ることは則ち是あり、卽ち理想は漸次に實現せられて、而も理想は改革による見在の進歩と共に復た進み行くが故に、見在が進歩するに拘らず永遠に理想に追及せざる所以なり。彼厭世主義者流は此事實を見て煩悶し、遂に見在と理想とを雁行せしむる所以の楔子たる改革を忽視するに至る、是れ此主義の弊なり。厭世主義にも亦諸種の段階あり、絶對厭世主義は人生世界に於いて到底理想實現の希望なしと爲し、相對厭世主義は多少の實現を認めて、猶見在の人生世界は理想を去ること甚だ遠しと爲す、要するに實現の効果及可能に屬望するの厚薄に依りて段階の種別は生ず。夫の理想を以て超絶的と爲すは、實理の協合を以てせざる理想卽ち究竟空想の弊に坐す。相

對厭世主義の究竟は、理想の實現を認むることの至極するに至り、而して厭世といふ所以の者を失す。

第三、進歩主義。　進歩主義は卽ち樂天主義若くは厭世主義の相對の究竟にして、進歩的人生觀より基づき來る。謂へらく、人生世界は見在卽理想に非ず、見在は永遠に理想に合一するの機なし、唯夫れ時を經として人生世界の歷程を察すれば、一たび人間の理想たりし者の次第に實現せらるるは事實にして、見在は次第に改革せられ以て進歩に赴く、而るに見在の永遠に理想に合一するを得ざるは、是れ理想も亦永遠に進歩するが爲にして、理想と見在との永遠なる進歩は、是れ人生世界の永遠に進歩する所以なり。抑、斯かる進歩は何に基づくか、是れ卽ち理想に基づき、理想の完全なるに基づく、これが根柢に理法あり、卽ち實理主義を待ちて玆に斯期圖あるを得。見在の人生世界は樂天主義が謂ふ如く最美にもあらず、厭世主義が謂ふ如く最惡にもあらず、人生世界の過去は較、醜惡にして、將來は較、善美なり。人生世界は漸次人力を須ちて進歩する者にして、現在は正に此進歩の過程なり、舞臺なり。進歩主義は亦大觀主義、實理主義に本づき、社會本位主義と輔車の關係を相有す。[二八]進歩主義には唯人の力量によりて段階あるのみ、段階は厚薄の差等のみ。

人生觀に基づく理想は、個人と世界との關係に本づくが故に、勢、社會を介せざるを得ず、故に其體に於いては個人的理想なるも、其用は則ち社會的理想にも及びて其屬

二八　是れ教育に應用すべき要項、而して又同時代の人の兎角相容れずして、百年論定といふことある所以なり。

性の一に居ることを得。[二九]

二九　ルー・スタインはその社會觀たる社會的樂天主義なりと結論せり。Ludwig Stein: Soziale Frage im Lichte der Philosophie. 末章。

第六節　個人的理想の價値

個人的理想の根本なる者及實地的究竟なる者、粗、上述の如し。今理想本有の性質に顧て、總じて個人的理想の價値を評定すべし。

個人的理想の極致は、大觀主義を根本とし、實理主義、社會本位主義、及進歩主義を實地の究竟理想とす。個人的理想は必ず宇宙の全體に關係を有せざる能はず、其人生に直接する者については、必ず社會に關渉せざる能はざるなり。是故に社會的理想は個人的理想をして完からしむる所以にして、社會的理想の成立なきときは個人的理想は其體を成すに由なし。此意味に於いて、社會的理想は個人的理想の規定なり。

社會的理想は衆個人を通して實現せらる、實現は理想の要素なり、乃ち衆個人の實現は社會的理想を規定し、而して衆個人の理想は衆個人の實現を規定す、故に個人的理想は、此意味に於いて、社會的理想の規定なり。

是故に理想の二大類別は、相互を規定し、冠位劣位の論理的關係に於いては兩者密に相關して何れとも定め難き一團を成す。唯個人的理想、既に從來の誤謬の如く全然個人に局する主我的のものにあらず、社會に關渉し乃至宇宙に關係するに於いて成立すること明確となりたれば、此紛糾せる一團の理想は卽ち宇宙の最上位たる社會

渾一體[二〇]の理想を與ふる者となり、個人的理想は卽ち亦此社會理想の一方面一部局を形成する者なることを確認すべし。[二一]

個人的理想の充實せる解釋は、隨ひて、此紛糾せる一團を解明せる後ならでは能はず、是は宜く社會的理想の講明を須つべき者なり。

二〇 本著第一卷社會學序說第一篇第一章。

二一 Eugène Rostand : L'action sociale par Initiative privée, 2 vols, 1896. 粗個人行爲と社會理想との關係なる論ず、氏は從來の社會主義者の態度の社會に有害なる極論して社會政策の要を揭ぐ。

第三章　社會的理想

第一節　緒論

社會の理想に在りて、社會的理想は實に其本部を成す、社會的理想は卽ち社會經營の方針なり。

個人的理想に於けるが如く、社會的理想にも亦大小輕重、數多の差等あり。社會經營の方針といふ、大方針の全般に關する者、小方策の一時一局に限る者、種種多樣ならざるを得ず。然れども其輕き者、其小なる者は、通例既に之を主義と謂はずして政策と謂ひ、以て大體の方針と區別す。

今社會動學の企つる所も、亦大方針卽ち大理想を確立せむとするに外ならざれば、這等の政策論に至りては、他の各個の體制、各個の運營、要するに之を各個の社會事項を取扱ふ科學に讓りて妨なしとす。

一其教化に關する運營のもの各種は特に目的に取扱ふ科學は教政學や世界學の年來の壇上に於ては、新學予試みの實驗的に組織し、而して社會學の實驗學に關する系統的に組織し、而して社會學の實驗學に關する系統的に組織し、而して社會學の實驗學に關する系統

以てするを適理とすべきも、發生は先天的事項にして、理想の得て關る所にあらず。乃ち社會的理想の取扱の範疇は、社會の體制及運營の二項を以て之に充つべく、此二項各其形と質との二面を有するが故に、大體此によりて十字分類を成すべし。卽ち左の如し。

第一、體制の形式に於ける理想。
第二、體制の實質に於ける理想。
第三、運營の方式に於ける理想。
第四、運營の實質に於ける理想。

然るに運營の實質に於ける理想は、理想中の理想、方策中の方策、實に社會行爲の理想の眞髓とも謂ひつ可き者なれば、特に詳覽を要する者あり、乃ち更に之を左の五類に攝して審理するを要す。

第五、社會の統制に於ける理想、政治上の理想。
第六、社會の對關に於ける理想、國際上の理想。
第七、社會の生活に於ける理想、經濟上の理想。
第八、社會の修養に於ける理想、教化上の理想。
第九、社會の職分に於ける理想、文明上の理想。[二]

今此順序を追うて各種の社會的理想を歷觀す可し。[三]

第二節　體制の形式に於ける理想

社會體制の形式に於ける理想は、之を三類に大別す。

第一、階級主義。

二
(1) Ideals as to the form of social organization.
(2) Ideals as to the matter of social organization.
(3) Ideals as to the formula of social function.
(4) Ideals as to the matter of social function.
(5) Ideals as to the social regime: political ideals
(6) Ideals as to the social interrelation: international ideals.
(7) Ideals as to the social life: economical ideals.
(8) Ideals as to the social refinement: cultural ideals.
(9) Ideals as to the social duty: civilisational ideals.

三
社會一般の理想、ユトピアの書策は從來見しらず。Victor Considérant: Destinée sociale I. p. 36 に Paix général, et considération des pen-

第二、平等主義。

第三、秩序主義。四

第一、階級主義。社會の成立に於いて、事實上數多の階級の存するを看て、直に之を是認し、各種の階級は、各其必要あるを以て永久に之を保存し行く可きものと爲す。階級は社會に存し、個人に對しては先天的なり、故に階級主義は示命していふ、各個人は社會に於いて自個所屬の階級以外に出づ可からず、個人の職分は、各所屬の階級の內に在りて、爲す可きを爲し、爲す可からざるを爲さざるに在り、如何なる改革者も社會固有の階級を打破するを容さず、斯かる打破は破壞なり、叛逆なりと。階級の差別は各人地位の差別にして、卽ち各人資格の差別なり、各人身分の差別なり、而して之を以て先天的恆存的なりとするが故に、各人は生れながら既に不平等なる者なりとす、是れ階級主義の大要なり。抑、各人は生れながら必ずしも平等ならざるは則ち之有らむ、而も社會に存する階級は此先天的不平等の要因たるか。要因たるは或は之有らむ、事實上に存する見在的階級組織は果して恆存の權威を有するか、何を根據として之を立證するを得べしとするか。階級主義は階級を打破するは破壞なり叛逆なりと謂ふも、階級を打破して國家、社會の存立を害せざるのみならず、益、更始隆昌の運を來せる者、史上其實例に乏しからず。且階級の打破にして果して叛逆なりとせば、階級の新造も亦叛逆ならざる可からず、何れの國も終古一定の階級を

plies;
Organisation de tous les travaux utiles;
Harmonie des intérêt, individuel et collectif;
Développement intégral des facultés humains;
Fusion de toutes les classes;
Liberté parfaite de l'individu au sein d'ordre;
Attraction industrielle et unité d'action.
Tel serait le tableau offert par cette société normale, bien différente de la nôtre.

とあり。學術的には餘り茫漠たりされど從來理想の研究の幼稚なりしや概れこの類なりしなり。

Novicow: Conscience et vol. soc. (Chap. VIII.—Ideal social signifie, en dernière analyse, un état où les hommes seront groupé autrement qu'ils ne sont aujourd'hui et comprennent des action différentes.

といふのみ、格別新しき考あるに非ず。社會理想の研究は、題目として新しき者に非ず。Léon Walras: Recherche de l'idéal social 1867, 68. Eugène Fournière L'Idealisme social, 1898. 唯其內容の充實は必ず社會學の發達に俟つべし、健全なる發達に俟つべし、是れ此問題が今日極めて新しき所以なり。

四

1 Principle of caste, classisme.
2 Principle of Equality, Egalitisme.
3 Principle of Order

凡そ此類主義理想の討究は、歐西に於ける學問上太た淺き者とす、故に學術語を例として其一定せざるものを見るに難し、或は英、或は佛、雜然として列擧し致す所以なり。

以て立つ者あらず、必ず多少の開展あり、或は複雜を增し、或は廓清を經て單純となる、比比皆是なり、乃ち這般複雜の增せるによりて生成せる階級は、其本始旣に叛逆の結果に非ざるなきか、斯くて階級主義の執る所は自家撞着に陷らざるを得ず。見在的事項に對し批評的吟味を加へずして之を是認するは、學問上には無理想觀なり、實踐上には偸安姑息論なり。階級主義にも種種の段楷あり、其絕對的なるものは階級の絕對的權威を持し、其相對的なる者は階級の權威に多少の制限規定を置く、此規定的事項は何なるかと問ふに至りて、階級主義は主義として、消滅す。

第二、平等主義。　平等主義[五]は之に反して謂ふ、社會の體

五　Westel Woodbury Willonghly: Social Justice, 1900.　平等に精神的、自然的、民事的、卽私權上、政治的、社會的、經濟的の各種區別を成し、其論ずる所頗る精密なり。一般に所謂平等の義は此所に至らざるこゝと遠し。

制は個人の平等を以て其必然當然の形式と爲さざる可かず。個人の平等は天賦なり、甲、乙を壓し、丙、丁を制するは、天理に戻る、若し丙にして丁を制するを容さば、丁亦丙を制するを容すべく、而して社會は爭亂の衢となり解體の匪運を趁ふの外あるべからず。天の萬物を生ずるや一切平等の惠澤を降す、階級は人爲なり、一切の不平等は皆人爲なり、人爲の事物は亦人の之を破壞するを許容す、天に戻る人爲の事物は宜く直に之を破壞し去りて天に循ふべきのみと。平等主義は殆どすべて見在の階級組織に反對せむとして現はる、乃ち其懷疑的態度ある所以にして、其見在的事物を盲認し是認せざるに於いて學問的に一歩を進めたるもの。然れども、抑、平等は果してしかく天賦

なりや、天の各個人に賦する、必ず先天的の不平等なしと謂ふを得るや、暫く之を謂ふを得とするも、後天的にして而も必然的なる不平等なしと謂ふを得るや、究竟果して人爲的ならざる、卽ち天賦の、不平等なしと謂ふを得るや。社會に規定あるが如く、個人亦此社會の中に在りて、間接に社會の規定を受け、直接に各個の特殊を來す所の規定を受く。先天的には男女の差別あり、賦性の厚薄あり、後天的には老幼の差別あり、時處位の差別あり、經驗の差別あり、而して男女、賦性、時處位、及經驗の四者は共に個人の規定にして、而も天賦なり人爲に非す、卽ち必然的規定なり、蓋し後天的規定、必ずしも每に人爲に非ざればなり。是を以てして、猶且人は皆平等なり平等は天賦なりと謂ふを得るか。然り而して平等主義や亦自ら處する所以を誤れり、平等主義は唯是れ理想なるが故に、平等が人間の取るべき理想なる所以を確立せば、平等主義乃ち確立せむ、而して平等主義の期する所實に此に在りて、而も其方法を誤れり、此確立の爲に捷徑を取らむと欲して而も失敗せり。夫れ先天的なる者必ずしも之を保存す可きに非ず、天賦なりとて必ずしも其儘に留存す可きに非ざるなり、駢拇裂唇は醫師の後天的治療を仰ぐに非ずや。理想の權威は他に在りて在す。平等主義は、其立脚地に於いて誤れるが爲に實理と相容れざるを致せり。乃ち此立脚地以外に立つことの多少によりて平等主義に種別あり、此立脚地の外に出づるに隨うて平等主義は相對的となる、之をし

六　實理上平等を理想とする主義が幾許の價値あるかの評定は之を次項に讓る。

て相對的ならしむる所以の規定の詮議に於いて、這般誤りて立せられたる平等主義は滅亡す。[七]

第三、秩序主義。　平等主義及階級主義の詮議の究極は乃ち秩序主義を成す。社會體制の形式は要するに秩序を以て理想とすべし。階級の社會體制に於けるや、毫も必然的なるに非ず、其個人に對するや、決して先天的恒存的の權威あるに非ず。個人の社會に於けるや、決して絶對的平等なるを得ず、個人の生存は、社會に由り社會に於いてせざるべかず、社會は體制を有するが故に、各個人は皆此體制の一部分を形成するを要す。社會體制の一部分として個人相互の關係は、之を名づけて秩序と謂ふ。秩序は階級に似て非なり、階級は地位を以て人を制限し、秩序は人

七　Bösch : Sociale Gerechtigkeit, p. 32 は Gustav Schmoller : Grundfragen der Rechts u. der Volkswirthschaft, 1876 を祖述し、平等主義の實質を擧げいふ。Demgemäss dem Princip der gleicher Freiheit hat der Bürger ein Recht : auf Körperliche Unverletzlichkeit, auf freie Bewegung und Ortveränderung, auf der Gemass der natürlichen Medien(Licht, Luft, Grund und Boden,) auf Eigenthum, auf geistiges Eegenthum, auf die Freiheit des Schenken und Vertrag, auf freien Erwerb,auf Freiheit des Glaubens und der Kultus, auf Freiheit der Rede und der Presse.

を以て地位を充たす。秩序は平等を拒絶するに似て非なり、各人必然の不平等に應じて、之に適する地位に各人を寘くに於いて、秩序は各人に對して平等なり。秩序を以てせずして、所謂平等を以て、必然的に不平等なる衆個人を遇せむか、其受容の結果は寧ろ大に不平等なる者とならざるを得ず、卽ち秩序主義は之を比例平等主義[八]と名づくるを妨げず。抑〻平等が所謂天の眼に於ける希待たるは明白なる事理たり、若し甲、乙を壓するを妨げずば乙亦甲を壓するを妨けずして、社會は解體に了らむといふは、沒す可からざる定說たり。唯夫れ秩序が示す所の事實、體制的不平等は必然にして、且世の進むに隨うて其益〻加倍すべきは、進化の觀念よりするも直に明かなる事實なり。故に

八　Proportional Egalitism.

平等の理想を此間に實現せむとするや、平等主義者の所謂不平等は避く可からず。唯秩序の主義は、階級主義の如く地位の爲に人を隷せず、社會の體制を充たすに人を以てし、之に應じて一切の平等は之を保持す、秩序主義は社會の體制を以て必要且十分なる規定とする平等主義なり、と謂ふを妨げず。

秩序主義が大觀主義實理主義系の各理想に應ずるは、多言を待たずして明なり。

社會體制の形式に關する主義は、單獨に唱道せられしこと從來頗る罕にして、政治上の主義の一部を組成せしを多しとす。階級主義は、近世に於いては、積極的に之を唱道する者殆ど之あらず、而も秩序主義より、知らず識らず膠柱の弊を生じて此に橫流する者亦尠しとせず。獨逸現時の理想が秩序主義なるを、模習の徒乃ち以て階級主義[九]と爲すの類は其適例なり。一切の懷疑的思想の史的意義の例に洩れずして、此部類に屬する理想の警覺を成せる曉鐘は、實に平等主義に在り。平等主義の大に唱へられたるは、佛國革命前の思想家、及北米合衆國建國の傑物に在るが、更に遡りてはロックに在りとせざる可からず。東洋、儒學の精神にては、秩序主義夙に發達せるが、暴君汚吏經世の路に當るときは、往往にして階級主義の思想に轉化す。西眼東視の徒、最も此を以て之を誣ゆ。

九　階級主義、就中貴族及富豪の社會的意義を批判せるは、W. H. Mallock: Aristocracy and Evolution. A Study of the Rights, the Origin, and the Social Functions of the Wealthier Classes. N. Y. 1898 の如き、大人物を社會進歩の原因と爲し、社會の進歩は殘存に存せずして權柄に存すと爲し、以て階級の利益を唱道す。A. Ponsonby: The Decline of Aristocracy, 1912 は英國を中心として近世貴族階級の衰頽の事實由來を稽査せり。

第三節　體制の實質に於ける理想

社會體制の實質に於ける理想は、之を三類に大別す。卽ち左の如し。

第一、個人主義。

(1) Individualism.
(2) Etatism.
(3) Socialism.

第二、國家主義。

第三、社會本位主義。

第一、個人主義。社會體制の究竟的因子は個人なれば、社會の體制は成るべく個人の生存發達を妨障せざらむを期すべき者たるべし、斯かる體制は極めて簡易單純なるを要し、其究竟は、單純なる個人の羣棲となり、特に社會の體制と稱すべき者なきに至るを期す。是れ卽ち個人主義の理想にして、縱令多少の體制ある社會に在りても、其各個の行爲は、皆此究竟的因子たる個人を標的とせざる可からず、社會の究竟は、社會滅びて個人獨り存するの事態なる可し。今や動もすれば國家を說き、之が爲に個人の發達を妨障して顧ざる者あるが如き、大に社會發達の針路を阻害し、社會が其究竟の境地に達するを遲延する者なりといふ。個人主義が個人を以て社會の因子と爲し、社會の發達と個人の發達とを契合せしむるは、理に於いて當れり、然れども社會の究竟地を揭げて、社會の體制は漸漸單簡となり、社會滅びて個人乃ち全しといふに至りては、全く社會開展の實理を解せざる者、抑亦個人生存の實理を解せざる者と謂はざる可からず。個人の發達は社會の發達に伴ひ、而して社會の發達は體制の發達を必要とす、社會の體制は、發達に隨ひて複雜を加倍し、而して個人と社會との關係は益複雜となる。是故に、個人を主として社會を客とする個人主義の觀地が實地に適切なるに幾かりしは、寧ろ草昧の時運に於ける過去に在りて、之を以

て遠き將來の理想と爲すに至りては、事理の轉倒なり。但し個人主義の個人を妨障する者に對して擁護者と爲りしは確に其功を認むべきも、是れ學問上個人主義に對する陳疏とならず。個人主義の絶對的なる者は、究竟社會の全く滅びて個人獨り存せむを信じ、其相對的なる者は、社會は必ずしも滅びずして多少個人を制限規定するを認む。其何を根據として斯かる制限規定たるを得るかと問ふに及びて、個人主義は茲に滅ぶ。

第二、國家主義。　國家主義は正に個人主義と相反して、謂ふ、個人は社會體制の究竟的因子に非ず、國家卽ち是なり。看よ社會の發達するや、當初連鎖なき散在の個人より、漸次羣棲人衆となり、次第に體制を具へ、其最も發達せる者卽ち國家に非ずや、[一]卽ち社會體制上の理想は正に國家其者にして、個人の如きは言ふに足らず、社會の發達は益、國家を發達せしむるに在り、國家を發達せしむるは個人の國家に賴りて立ち國家に依りて存すること益、深く且厚きに至る所以にして、乃ち個人の幸福を將來する所以なり。されば徒に個人の發展を顧慮するは國家の發達を希圖する所以に非ざるのみならず、抑、亦實に個人の幸福其者の爲にする所以に非ざるなり、個人の上に國家に由る多少の制限、殊に其權利の制限の加はるは、是れ個人の幸福に取り必然忍ばざる可からざる所、國家主義は、個人の幸福の爲に、多少個人の權利を國家に收納して、國家の發達卽ち社會の發達を計る者なりと。抑、國家主義が社會

一　ロオレンツ・フオンスタイン其魁首、アムブロキツツ亦之を述す。

の發達は個人單位より國家單位に進むに在りと爲すは、立論粗雜を免れざれども、個人主義の事理轉倒には比ぶ可くもあらで社會開展の實理に協合す、然れども、是が爲に果して個人の權利は益〻制限せらるべしとするか。社會の未た判明なる體制を有せざりしや、個人は未た所謂權利の判明なるをも有せざりしなり、國家の統制起るに及びて、始めて個人に判明なる權利あり、個人權利の國家に由る制限は、寧ろ權利の內包的要素たり。社會體制の實質上の理想は、既に是等の事項の具備せるが上にての方針を問ふ者、社會の體制は國家の生成に由りて著く發達せりといふをもて、直に國家の統制は社會の發達に隨ひ增大發展すべしと言ふを容さず、寧ろ國家の統制の下に社會の非國家的體制の益〻發展するこそ是れ社會開展の實理なれ。國家は統制の職能を全うし、而して社會の開展は其以外に於いて幾多重要なる事項を含有す。國家主義は、國家の統制が社會開展の一時目的たりしを以て永久目的なりと誤認する者。社會の既に此統制を得るや、統制は唯更に進みて諸般の社會開展を致すの手段たるのみ、卽ち國家主義は手段を以て目的と誤認するの弊に坐する者なり。絕對國家主義は此大過を犯すこと深きも、相對國家主義は必ずしも國家の統制機能の發達のみに重を置かずして、具體的に國家と稱する者、卽ち國社會に於ける諸般事象の發達を以て社會發達を期す。此統制機能に重を置くの多少に隨うて、國家主義は絕對より相對に至る

國家權力の適宜縮小說を執れる論者に Michel Chevalier, J. S. Mill, H. Spencer あり、此に反し國家權力膨脹論者には Gambetta, Dupont, White, Jules Duval, Horn あり。Dupont 謂へらく、個人は其自個には進步の原理を有せずと、Emile de Lavelaye亦少しく穩和なれども同じく此派に屬す Lorenz von Stein 謂ふ、國家は人の協同體にして自存自動的人格とまで高まれる者、國家は人格の最高形式なり、國家の事業は理想的には無制限なり。A. Wagner 亦これに近し、謂へらく、國家は二個の使命を有す、一は社會正義の目的(Rechtszweck)なり、二は文明の目的(Kulturzweck)なり。A. Schäffle も亦國家を以て社會の腦髓とせり。蓋し Bluntschli は國家の眞正直接の目的は國民の能力を展開し、其生活を完全にして以て人類全般の運命と調和し、

道義的政治的義務を全うするに在りとせり。蓋しスタイン、ワケネル等は國家の觀念に於いて時に或は國家と謂ふ、機關と謂ふ、學制機關なるに意味し、即時統一に味し、或は國家社會を意味し、觀念の混雜を全然離脫せざるに弊所なる存し、而して國家主義の弊亦其前者の意義を用ゐるに於て乃ほ至る。Paul Weissengrün: Der Marxismus und das Wesen der sozialen Frage. 1900. は國家を以て社會よりも一層現實なる存立と爲す(S.388)これ國家を社會の意義に國家を用ゐたるなり。

一一　Paul Leroy-Beaulieu: L'Etat moderne et ses functions. 1890. 國家氏の結論にいふ、國家は決して社會の膨脹に非ず、社會の進路に規定し、これが方向を拘束する能力、使命なるの權理、能力、使命なるの權理、能力、使命なるの權理、

の決定を與ふること、社會靜學の明示する所の如し。故に此主義は個人主義に非ず國家主義に非ず、將た又是等と相駢ふべくして而も人の未だ明に命名し揭揚せるなき家族主義ともいふべき者にも非ず、乃ち社會體制上の社會本位主義なりとす。

社會本位主義が亦根本思想以下の大觀主義實理主義に契合するは明白なり。

社會の內的體制に於ける社會本位主義は、國家主義の如く國內的自存を以て究竟の理想とせず、社會の外的對關、國際關係に於いて、大に國家主義に優るの主義と協合し得ること、第七節に詳なり。立國の本義を社會本位主義に寘き而も若干對外關係に重を置くの見地より命名するときは、斯かる社會本位主義は宜しく呼びて强國主義と謂ふべし。强國とは自國に於いて自國存立の保障を有する國社會の謂なり、强國主義とは强國たらむことを以て國社會經綸の根本義諦とする主義の謂なり。[一五]

一五　日本社會學院年報第三年第一二合冊、日本社會學院調査報告之を詳說せり。

個人主義及國家主義の爭議は、近世の歐洲に於いて起れる者、最も先づ之を解釋せるは英國なり。スチュワルト王朝の末葉に際し、ロックは先づ大に個人主義を唱へ、ホッブスは之に反して國家主義を唱ふ。ロックの個人主義は、自由平等の觀念と結びて英國の革命を成し、米及佛に革命を效果せる、既に見たる所。國家主義の大なる成功は、近時の獨逸帝國に於いて之を見る。獨逸の無形的帝國の肇造に與れる諸豪の中、根本思想の樹立はヘエゲルを以て白眉の功に推さざる可からず。氏は透徹貫通せる獨逸主義國家主義を以て、其經世の議說を立つ、其他獨逸近時の思想家、多く皆是なり、英國の近代、スペンサルは全く個人主義を奉ずること、其社會學原理等、種種の著述に見るべし。ミルの自由論、代議政體論[一六]も頗る此色彩あれど、絕對的ならず、晩年氏が社會主義、最進の名目に隨へば實は社會本位主義[一七]の眞價を認むるに至りて愈〻調和を得るに垂とせり。近時獨のイエリンダはサヂニイと共にルッ

一六　J. S. Mill: Liberty; Representative Government.

一七　觀念の曖昧、名辭の混亂の爲に歐西の碩儒亦族幟の亂るゝあるは、獨りミルに限らず、社會研究に從事する者の尤も鑒るべき所。尤も多少困難を冒して術語の用語に慣むの勇氣は尤も學徒に必須とす

ソオ及ヘエゲルに反對し、既に自然法主義及國家主義の法律觀に反對して、社會的利害關係が一切の權利の尺度なることを主張す。[一八]米のケエリイも亦個人的及國家的利害關係は一般社會に於いて協合する旨を論し、[一九]チイグレルも亦個人主義と社會主義とを比論して同樣の論旨に歸せり。[二〇]

支那に在りては、其正統の思想は社會本位主義なり。其個人主義は老莊の徒に見るべし、楊朱も亦個人主義、墨翟は頗る曖昧なり。宋に至りて、其著名なる黨錮の禍も、主義上よりは國家主義と社會本位主義との爭に近し、王安石は國家主義、司馬君實、歐陽永叔は社會本位主義の領袖なりき。

第四節　運營の方式に於ける理想

社會運營の方式に於ける理想は、其運命觀と密に相關す。之を三類に分つ。

第一、急進主義。

第二、保守主義。

第三、進步主義。[二一]

第一、急進主義。　社會の經營の理想を立てて之を實現せむとするに際し、時、處、位、卽ち社會の規定、現狀等に顧慮することなく、驀馳して其實現を急ぐ者、之を急進主義とす。如何なる社會も、此理想が齎す所の新事物を迎へむが爲に、先づ排除せらる可き舊事物を有せざるなし、而して舊事物は此主義が毫も眼中に置かざる所、故に其理想の實現は、勢、舊事物の破壞を伴はざるを得ず、是れ此主義が一名破壞主義の目ある所以なり。抑、急進主義は社會の事

一八　Zweck im Recht. I, 237, 523, 532.
一九　Bouglé, p. 121.
二〇　Social Science, Chap. LV.
二一　Sociale Frage, eine sittliche Frage. Kap. I.
(1) Radicalism.
(2) Conservatism.
(3) Progressism.

物を改革せむとする者、卽ち理想を立てて之を實現せむとする者、故に其志や社會の進歩に存す、且此主義の根柢には、社會は常に改革進歩によりて其新鮮なる活動を保續すと爲すの思想ありて、其大綱は洵に誤らざる者ありと雖も、惜いかな社會の體用を究め知るなきが故に、社會の改革が社會の成立に隨ひて、種種の規定の下に始めて成し得べきを顧ざるの大過を犯す。社會の規定には人種あり、人口あり、天然的事項あり、制度あり、歷史あり、外社會あり、是等は皆社會の成立を規定し、隨うて又社會の改革進歩を規定する者。且社會は常に改革進歩によりて其活動を保續すといふも。そは果して急進主義が考ふる如き新事物の間斷なき將來を意味するや、此點頗る細緻なる研究を要す。社會は代謝機能を有す、是れ體制を具へて運營する者、其の成分の恒久ならざる者に、必然の機能たり、且社會の行動は理想的行動なるが故に、社會の眞相の改革進歩の連續に存すべきは勿論なり。但此改革進歩は、斯かる原理の上に立つが故に、必ずしも急進主義者の考ふる如き、所謂新事物の間斷なき將來を要する者に非ず、之を急進主義第二の弱點とす。急進主義にも絶對より相對に迄る種種の段階ありて、そは規定の藐視と、理想を新事物に限るとの二點に於いて、絶對的なるか將た相對的なるかの差等に基づく。絶對急進主義は、社會の眞相をば、改革進歩の連續たりと觀ずるより流れて革命波瀾の連續たらしむ。相對急進主義の究竟は、規定の效力を充分に認め、

理想は必ずしも所謂新事物の將來を要件とせず、乃ち急進主義の實を亡ふ。

第二、保守主義。保守主義は正に急進主義に反す。謂へらく、社會の理想として連續約行爲を司配する者は、新事物の將來に非ずして舊事物の保存に在り、是を以て社會の進歩は改革に在らずして保守に存す、夫の急進破壞の如きは最も社會を急坂に轉じて迅速に之を千仞の谿底に陷擠する者なり。社會は所謂新事物の外より入り來り加はり來ることに賴りて進歩する者にあらず、社會の進歩は唯内に發し内に長じ内に成る者に由るあるのみと、是れ此主義の根柢に含有せる思想なり。抑、社會は有機體以上の實在なり、夫の有機體を以て見るも、其成長發達は、たとへ其資料を外に取るも、必ず一旦之を同化して、以て自個體内の實質を增大し、以て其成長發達を成す、社會の進歩は體制の發達、運營の發達、乃至理想の發達を以て成る、其内的發達なるべきは必然にして、外來の新事物の單に附着的存在を成すに止まるは、有機體乃至社會の發達に於いて、毫も與る所なし。保守主義の急進主義より一歩を進めたる此根柢的思想を有するは、大に多とするに足る。然れども、社會の事物は果して保守主義の所謂舊事物の保存に由りて完きを得るか、社會理想の進歩は果して單に保守に安んずるを得べしや。人間理想の進歩は種種の新事物を發見し、想像す、是等亦皆舊事物に非ずとして之を斥くべきか。且保守主義は、社會の運命をば、其初に完

全にして其後漸く缺陷を生ずとするの誤想を有す、是れ實理の敎ふる所に對して純然たる誤見なり。保守主義には大に段階あり。其絶對的なる者は唯在來の一切具象的存在を以て社會の事物と爲し、其以外の新事物は之を排斥し、且社會の運命を以て、絶對的に、初に完美、後漸く缺陷を生ずと爲す、所謂尙古守舊の主義なり。其相對的なる者は、抽象的に社會の事物を目し、俗眼には新事物として映じ、具象的には全然在來の事物と其相を異にする者も、一社會が享有する事物は、抽象的に其成分を分析すれば、要するに在來の事物の分合變化、唯其構成を異にせる者に過ぎずと爲す、卽ち流俗の所謂新事物も、此標準に照して、必ずしも之を拒斥せず、隨うて社會の運命を以て漸漸自發的開展を遂ぐべき者、社會の規定の下に開展する者と爲す。此分析抽象觀の精粗に隨うて、相對に差等あり、其究竟は保守の目に副はざるに至る。

第三、進步主義。　進步主義は卽ち急進主義及保守主義の究竟なり。謂ふ、社會は宇宙の內に在り、人を以て成分とし、體制を具へて運營す、旣に詳に觀たる所の如し、乃ち其運命や亦規定の下に進步を成すに存す、故に社會理想の進步するや、新理想の發生するは固より必然にして、玆に顧慮を要するは、其在來なりや否やに在らず、實に彼四種の社會の內的規定に對しそが如何の關係を有するか、此等の規定は此理想の實現の爲に如何なる調節を與ふべきかに存す。新理想や、其抽象的成分關係に於いて、在來社

會の事物と密接なるは是れ新理想の發生成立に於いて既に已に存する所、以て說明的事項と爲す可くして、以て標準的事項と爲す可からず。彼四項の規定の中に就いても、實地上最も深く顧慮を要するは制度及歷史なり、體制は社會の一部分に觸るるの效果をして全體に及ばしむる因緣たり、歷史は社會事物をして時を經として相互に複雜なる關係を有せしむる因緣たり、之を顧慮せざるは急進主義の弊なり。新事物と舊事物との抽象的關係の是認に就いて進步主義は保守主義と共なれども、之に拘せられざるに於いて差違あり。進步主義は社會の渾一的研究の結果たる實理に準據して、着着其理想を實現し、其體に於いては自發的開展を成し、其用に於いては無限の開展を期し、乃ち秩序ある改革進步の連續を以て社會の眞相とせよと示命する者なり。

運營の方式上の理想は、社會の運命觀と密に相關すること斯の如きを以て、個人的理想に在りて人生觀に基づける理想とも亦密に相關す。進步主義は、個人的、社會的といふ區別の外、兩者に於いて全く同一なるを見る可し。[三]

第五節　運營の實質に於ける理想

社會運營の實質に於ける理想は之を三種に別つ。

第一、干涉主義。

第二、放任主義。

三　社會運營の方式に關する理想については、スペンサル曾て聊か之を論じ、ミルは尤も秩序的進步を論ぜるも、未だ詳なる能はず。近者フェルリは、Socialismus u. moderne Wissenschaft (p. 123–152) Entwickelung, Revolution, und Umsturz を論ぜり。ノギロフの所謂 Philoneisme Misoneisme 愛新主義と憎新主義との論も關係あるべし。Gaspillage des sociétés modernes.

第三、實理主義。[二四]

第一、干涉主義。　社會の運營は大小となく悉く人爲を以てするを要す、人爲以外、自然的生成は、一切の社會運營に於いて全く之なし。是故に社會の行動を司配する者、卽ち社會の統制者は、細大百般の事に於いて社會に干涉するを要す、凡そ自然的に生成する事項は悉く惡なり、非なり、之に反抗し之を除却せずんば止むべからず、是れ干涉主義の眞相なり。社會の統制に當る者、其數の小なるに隨うて此主義に陷り易し、是れ自然の勢なり、統制者其者の中、既に意見の分岐を見るときは、統制者の理想を以て全知全能と爲すの弊は起り難ければなり。專制政體が多く干涉主義を伴ひ、共和政體が之に反する者多きは、此理に

[二四] (1)Over-legislation. (2)Laissez-faire, laissez-passer. (3)Positivism.

基づく。經濟上、敎化上、共に理想の重要新に知られ、爲に其過重視せらるる場合には、頗る此弊を見易しとす。抑干涉主義が、社會現象に於いて理想を認め、社會の運營に於いて理想的經營の要を認めたるは、是れ不可動の眞理に詣れる者なるも、其一切の自然的生成を認めずして之を拒斥するに力むるは、勞して害ある拙策と謂ふ可し。本來理想の內容、既に理、卽ち自然の理法を包含するに非ずや、自然にして全く信憑す可からざるか、理想其者亦成立するを得じ、干涉主義は既に其體に於いて矛盾を包有す。自然的生成が善となり美となるは固より理想の判斷を俟つ、自然的生成其自個に於いて善惡醜美なるに非ず、而も一切の自然的生成を以て惡と爲し醜と爲すは、是れ干涉主

義の誤謬にして、悉く之を善とし之を美とすると、過誤たるに於いて異なることなし。干渉主義の段階は、此自然的生成を非認するの差等に基づく、何を標準として此差等を判斷するかの問を受くるに於いて、干渉主義は亡ぶ。

第二、放任主義。　放任主義は正に干渉主義に反し、一切の自然的生成を以て善と爲し美と爲し、極善極美と爲し、復人の手を下すの餘地を存せざる者と爲す、乃ち社會運營の理想も、成るべく人の手を下すを避け、成るべく純粹に自然の手に放任するを以て社會運營の完美を圖るの道なりと示命す。放任主義は、干渉主義の弊を厭ふより起るを常とし、必ずしも人の理想を認めざるに非ざるも、謂へらく、理想は求めて致す可きに非ず、自然のなりゆき乃ち善き理想を與ふ、自然の成行に先だちて、如何に千思萬考するも、斯くして得らるる理想は、此善美なる自然の成行の以下若くは同等に止まる、其同等なるや、人の手は自然の手と協合するのみ、一毫の得失なし、其以下なるや、人の手は自然の手が成すより惡き者を成す、卽ち自然の手の仕事を害するの結果あるのみ、而して是れ大多數の場合然るなり、故に社會の運營は斷じて放任主義に隨ふ可しと。[二四]抑、放任主義が自然的生成の是認す可きあるを認めたるは頗る進める思想なりとすべきも、自然的生成は總べて之を是認す可しと爲し、乃ち事實は善を認證すとの僻說に陷れるは、實理を遠さかるに於いて、正に干渉主義と其科を等しうす。放任主義亦段階なきに非ず、これ自然

二四　ルツソオの言說は人の偏く知る所、正に此主義の領袖と云ふべし。經濟上曾て久しく此主義が殊に跋扈せる、經濟學史の明證する所なり。

的生成を是認するの差等に倚る、何を標準として此差等を一定す可きと問はるるに於いて放任主義は玆に滅ぶ。

第三、實理主義。　實理主義の示命に謂はく、社會運營の實質的理想は如上兩主義者の思惟するが如く輕易に希求せらる可きに非ず、自然の成行に放任せば、敎育の如き既に根本的無用有害の事なるべく、若し夫れ干涉主義を完全に勵行せば、物價は一一法令を以て之を規定するを要するに至るべし、兩者の共に理に於いて不完全なる、實地容易に其弊を見はすに非ずや。社會運營の實質的理想は、唯實理の示命によりて之を立するの一途あるのみ。實理の示命は自然的生成にも是認す可き者あるを認む、而も自然は必ずしも常に善美を生成せず、人は宇宙の一成分たり、宇宙は複雜なる渾一體にして、理想上より見れば種種の段階を有し、而して人間社會は其最上に居るが故に人間社會は其發達せる理想を役して自然の上に改革進步を加へ、以て宇宙の善美を增進す、是れ人間社會に本屬する天職なり。是を以て社會經營の根柢は之を實理の闡明に置き、實理の示命に基づきて社會は社會の理想を立て、且之を實現し、以て社會の進步を希圖す可し。斯くて實理主義は一切の社會現象に向うて其實理探究の途に上る、是れ社會的諸學科の起原なり。

極めて廣義にして、經濟政策、法律政策なども含む。

乃ち政治、[二五]乃ち國際、乃ち敎化、其原理の探究は、此を紹いで而して造詣を莽する者、是れ實に社會學實論の起原なり。

實理主義は、固より其名目の現すが如く、大觀主義以降

一貫の主義なりとす。

以上四節を以て社會的理想の大體を講明し了る。而も本節、社會運營の實質に於ける理想は、卽ち細大各等の理想の體系を以て完成すべき者、而して是れ實に各門の社會學科を須ち、又社會學實論の講明を要すべき者、今唯其最も大綱に亙る者を摘出して、更に五節を累ねて之を講明すべし。

第六節　社會の統制に於ける理想

社會の統制は社會が完全なる體制を具備する究竟の一歩として頗る重要なる者にして、之が爲に社會進歩の究竟は統制其者の進歩に外ならずとする誤謬[二六]をさへ出だすに至れり。今社會運營の實質に於ける理想の重要なる者を論ずるに當りて先づ統制に於ける理想を觀むと擬するは、斯かる意義に本づく。社會の統制に於ける理想は卽ち本義に於ける政治の理想にして、宇内の先進諸國が最も熱心に研究し、眞面目なる經驗を積み、輓近始めて小康を得るに至れる所の者なり。

二六　國家主義の流弊卽ち是なり。

社會の統制に於ける理想を三類に分つ。

第一、專制主義。

第二、自由主義。

第三、立憲主義。[二七]

二七　(1)Despotism ; Absolutism.
(2)Liberalism.
(3)Constitutionalism.

第一、專制主義。　社會の統制を有限なる一人若くは數人の手に專屬し、是等の一人若くは數人は無限の權能を以て統治權を執行するを期するもの是れ專制主義なり。

國家に於いて、統治の客體は國家を形成する一般人衆なれども、統治の主體は一人若くは數人、有限なる數者たるに過ぎず、卽ち大多數の國民は被治者として存立す。抑、社會人衆に於ける自然の不平等は事實上の必然なり、專制主義が就中其最も適當なる者少數をして統治の大權を執行せしめ、大多數をして是等の少數者の理想に隨うて行動せしめむとの主義を立するは、社會の統制に於いて最も成し易く、且自然に協合せる者と謂ふ可し。然れども、玆に專制主義の一大弱點は、是等少數の主治者及被治者の間に絕對的區分を成せるの根據如何、是なり。夫れ社會心意の統一は社會統制の要素なり、之を最も顯明なる少數人の心意に於いて統一すべきも亦社會統制の原則なり、而も統一といふは他の劣弱なる衆人の心意を滅却するを意味するに非ず、既に統一といふ、正に之に反し、如何に劣弱なりとも社會の成分たる各個人の心意は皆社會心意の成分として統一に入り來らむことを期する者、然るに專制主義は、全然劣弱なる衆個人の心意を價値とせず、專制主義は自然的不平等を認むれども、其不平等が絕對的、超絕的、不平等に非ざるを認めず。若し夫れ全然心意の高等なる作用、卽ち理想的行動の社會人衆に存せざる場合に在りては專制主義は毫も其弊あることなし、是れ是時に當りては、一般社會現象は、物的現象と同じく、心意の自發作用なく、隨うて某某の心意を沒却すると否との如き、毫も關する所に非ざればなり。而も人間心意の漸次

開展して、理想的行動に本づく所の社會現象多きを占むるに至りては、專制主義の弊や次第に顯著となり來る。夫れ理想なきの時代は主義なきの時代なり、專制主義や唯無主義盲動の時代に於いてのみ成立し得可しといふは、卽ち專制主義といふ一主義の成立せざるを證する者。蓋し專制主義にも亦種種の段階あり、曖昧不定の方法を以て隱隱裏に多少被治者の心意を認む、[二八]何を標準として此多少の程度を定むるかと謂ふに至りて、專制主義は亡ぶ。

專制主義に性質上二樣の種別あり、政治的專制主義及宗教的專制主義卽ち是なり。本來統制問題は社會心意の統一の必要より由來せる者、是故に衆個人自然の不平等は、一面に於いて政治的の治者卽ち君主によりて統制せらるるを要し、一面に於いては亦宗教上の先達卽ち高僧によりて統制せらるるを要す、是れ二樣の專制主義の由來なり。此二樣の專制者相互の關係によりて、政治と宗教との體制的關係に五樣の別を生ず。第一は君主と高僧とが本來同一なる者、宗教上の統制者が直に亦政治的統制者たるの場合卽ち是にして、所謂神政政體の組織を成す。[二九]第二は君主を以て高僧を兼ぬる者、政治的統制者が直に亦宗教上の統制者たるの場合卽ち是にして、所謂政教一致の組織を成す。[三〇]是れ此二專制者が各別異の發達歷史を有し、一旦其結托の有利なるを覺知して之を決行するときに生ずる者なり。以上の二樣は共に二樣の專制主義の完全なる實現を成し得る所の組織なるが、其不完全なる

[二八] 英國憲法史は實に之を認むる程度の進歩の歷史なり。

[二九] 羅馬法王の中世に於ける要求は、各國の政治的統制の漸く整備せむとするに際して、此體を希求せる者なりき。猶太の如き亦是なりき。Bryce: Holy Roman Empire, p. 46. 「當時 Christianity と Christian States とは到底不可離にして、當時の人は皆しかく考へたり、此二者は同一物の兩名に過ぎざりきといひ、且評して、是れ今日に在りて殆ど想像すべからざる所なりと記せり。今の歐米の凡俗が基督教と文明とを同一物の兩名なりと看做す、亦此類なからむや。

[三〇] 歐洲にて露土の如きこれなり。

者は次の三樣に存す。第三は高僧が君主の下に隷屬する者、是れ宗教上の統制者が政治的統制の下に在りて其職を竭す者にして、宗教的專制の甚だ不完全なるべきは當然なり、公認教制度の場合是なり。[三一]第四は高僧と君主と全く關係なき者、隨ひて宗教的專制は全く行はれず、是れ宗教上の自由制度の場合なり。以上の四者は皆同一國家の統制權內に於ける政治と宗教との關係なるが、相互に全く獨立なる二樣の專制主義一國民を支配する者あり、是れ一國の人衆は同時に全く相離れたる二個の統制を受くる者にして、其相撞着衝突の患なきを得るは極めて困難なりとす。[三二]五種の中、第一種及第二種は、一國內の秩序の爲には最も安定なれども、宗教の普遍性の效果たる其擴

三一　國教制度は上の二者の場合いづれにても行はるべし、時として又第三類の形式を取ることあるも、專制の行はれ得る內容に於いて異なり。

三二　耶蘇舊教を奉ずる加特力諸國今日の現況即ちこれなり。

衍性を害するの虞あり、是れ他國の民衆は政治的に他國の統制者を戴くの虞ありて、卽ち擴衍を受くる國家の主權が侵犯を蒙るの虞あればなり。第四種はまた斯かる侵犯の虞ある列國宗教界の形勢に對して國家が當然且必要なる自衞の具を缺くの弊を免れず、蓋し列國皆通じて此制度を取るあらば最も佳なるも、一國にても前二種の制度を取る者あるに際しては、苟くも國に宗教として固有せる者ある限り、之を以て自衞の具に供するは當然且必要なりとす、乃ち第三種の制度は最も斯かる場合に適當なる制度と謂ふ可し。第五種は宗教上の專制者に毫も政治上の權威なきを以て、之を信奉する國民に政治上の危險を齎すことなきも、政教二者の判別の理想的ならむ

ことは極めて困難なるを以て、多少の弊害は其毎に免れざる所なりとす。之を要するに、專制主義の爲には、君主と高僧との同一若くは一致を便とし、國家の自衞の爲には高僧の君主に隷屬するを便とし、而して社會發達の究竟は、兩者共に專制權を失ふを理想とす。[三三]

第二、自由主義。　自由主義は正に專制主義に反對なり。謂へらく、自由は天賦なり、自由は何人の何人をも制限するを許さず、社會の統制も亦此自由を如何ともすべきに非ず、斯く天賦の自由を有するに於いて各人各個孰れも相互に平等なり、不平等的體制を設くるは凡べて天理に反す、唯這般は便宜上、時に、處に、位に、極めて有限なる範圍內に於いて、合意により之を設置するを得るのみ、斯かる

三三　所謂政敎關係の問題は、政敎研究の包括的研究が、新に予期の別種の研究、樹立せらるべきあり、試みつゝ敎政學の各論第二門なり。宗敎研究に詳なり。行政の日本社會學院年報第一二合冊第一年第一五〇頁。Paul Leroy-Beaulieu: L'Etat moderne (第五篇第二章) Urbain Guerin: Evolution sociale 1891 (p. 207) 等亦參考に資すべし。

設定に於いて、一毫合意を超絕する事項、例へば時を制限せず、若くは處を制限せず、若くは位[三四]を制限せざるが如きあらば、そは自由の天理に背反す、國家の統制は斯かる有限なる合意的設定に過ぎず、必要去るときは何時たりとも徹去すべく、又成るべく速に此徹去の時期の來らむことを期せざる可からずと。抑、自由主義が人間の發達せる心意の作用に基づき行動の自由を喝破せるは、實に人間社會の發達に對して千古の盛事と稱するに足る、而も此平等の爲に、直に一切の事項に對して人間を平等なりといふは、少しく過論の弊に陷れる者。且社會の統制を以て一切の關係に於いて、極めて有限の存立と做し、時についても速に其必要の去るを企圖すをいふに至りては、社會

三四　委托事項は其隨一に居る。

の體用について全然無知を表する者。自由主義や、國家主義が統制を過重せると正に相反して、個人主義と全く相協合す。但し自由主義亦必ずしも常に絶對的に其主義を持せず、或る制限規定に服して而も成るべく此自由を發展せむと謂ふが諸種の相對的自由主義の眞相なり、此制限規定如何の問題は、到底自由主義の自ら解決し得る所にあらず、自由主義の極端は卽ち無政府主義なり。[三五]

Anarchism.

第三、立憲主義。　立憲主義は卽ち此制限規定を解決する者、而して專制主義の國家に於ける人智の開展に伴ふ統制上の進歩を成す者なり。謂へらく、社會の統制は實理の示命に基づき、固より各個社會の規定に察し、統治權行動の準則を制定し、統治者は之に準據して統治を爲す。統治に關する國家の理想は、此準則之を表し、統治者は此準則に離れざるに於いて統治者たり。此準則は之を憲法と名づけ、此統治者を立憲君主と謂ふ。立憲君主は憲法に卽かず離れず、[三六]國家心意の統一[三七]は斯かる憲法の規定を以てする君主卽ち立憲君主に於いて成さる。立憲君主の下に各種の統治機關あり、或は心意統一の爲にし、或は實行の爲にし、[三八]或は統制の根基を維持す、[三九]其體制や、國社會の大を致せる近世の諸國に在りては皆頗る複雜なるも、統制の理想たる立憲主義は、要するに斯の如きを希求する者とす。但し立憲主義や、既に實理の示命に隨ふを標榜す、乃ち斯かる統制に最終の權威を賦與する者は實理なり、實理は社會の規定を沒却するを許さず、故に其四項の內的規

三六　君主卽憲法にあらず、主治者は法律に從はずとの格言は、立憲君主と憲法との關係には之が適用を許さず。

三七　嚴肅にいへば國社會心意。

三八　立法

三九　行政

四〇　司法

定、就中制度[四一]及歴史は、極めて憲法制定上の要件たり、若し此に顧ることの不充分なる憲法あらば、そは似而非なる立憲國を生成すべし[四二]。學者は一方に一般臣民として憲法を遵奉護持するの責務あると同時に、一方には充分に憲法を研究し、實理の示命に照して正核適切なる批評的考察を加へ、憲法の改善を促し、以て憲法をして國家の統制に於ける理想の所託たるに負かざらしむるの大任務を有す。

社會の統制に於ける理想の、效果の範圍は、既に之[四三]を詳にせり。社會の統制一たび立つ、乃ち復た此に究竟局止することなく、更に社會進歩各般の問題の解決を要するは、忘る可からざる事とす。

四一　社會の規定として制度の最も根本的なるは、實に所謂國體是なり。

四二　憲法に關する細目論は、皆此必要上の論なり、今は立入らず、大體憲法の性質を論定せるのみ。

四三　本節の問題に關しては、歐洲の輓近二世紀の歴史は、其轉化の時期に在りしが爲に、これに關する議論、亦殆ど牛汗充棟といふべし。

政治上の理想は歐洲の社會が過去二百年間に於いて僅に解決を與ふるに至れる所、而も社會の性狀の均一ならざるや、英國を第一とし、米國を第二として既に其解決を完了せるも、獨逸の如き尚未だ全く透徹せりと謂ふを得ず、佛國の如きは實に振盪の裏に在り、露西亞の如きは僅に其問題の萠芽を發生するに進み、乃ち外來の事情より其早發を促し成せる者と謂ふ可し。蓋し國民自覺の進歩、各國一樣ならず。且各國の社會的規定の一樣ならざる、甲の解決を以て乙の解決に擬す可からざればなり。

東洋古來の政治上の理想は、其正徑や實に不文的立憲主義と稱す可かりし者、乃ち其準則は所謂道なる者卽ち是れ、特に帝者の準則は則ち所謂王道なる者に於いて存せしなり。蓋し東洋の所謂道は、個人相互の間の規定より進みて治者被治者間の規定に至るまでを包含せる者にして、今日の所謂憲法に於いて見るが如き成文は則ち之なきも、帝者の準則、臣民の準則は、其敎、其道に於いて儼として存せしなり。乃ち之を以て專制主義に擬するは、西眼東視の職職者流の事のみ。

我國維新の鴻業、立憲政體の開設に至りて小成す、其事項の價値は勿論なるも、其内容は今日猶識者の疑問に屬する者尠しとせず、不文を變じて成文と做す、其間内容の變改あるべきに非ず、而も明治の思想界や、未だ充分に理想の資料に於ける新者舊者の調和を成すに至らず、這般の疑義を遺す所以、而して學者の責務尙大なりとす。[四四]

四四　本章第三節參看。

第七節　社會の對關に於ける理想

宇内に列する衆多の社會、其相互の關係地位に於ける理想は、是れ國際上の理想にして、卽ち又衆多の社會より成立する宇内の秩序に關する理想たり、斯かる理想に三種あり。

第一、帝國主義。

第二、四海主義。

第三、人道主義。[四五]

第一、帝國主義。　帝國主義は、特定の國社會が自個を以て宇内列國の間に最上權ある者と爲し、自個の權力の下に宇内衆多の社會を屈從せしめ、之を統一するを以て究竟の理想と爲す者なり。此主義の見解に在りては、二個社會の相互關係は優勝劣敗關係の外に存することなく、我、彼を仆すに非ずんば、彼、我を仆すべし、若し夫れ我力微にして彼を仆すを得ざるに於いて、我の爲に計る、せめては彼の勢力の及ぶ以外に立たむを期す、是れ卽ち攘夷主義なり、[四六]攘夷主義は消極的帝國主義なり、帝國主義は積極的攘夷主義なり、就中其最も積極的なるを特に呼びて侵略

四五
(1)Imperialism.
(2)Cosmopolitanism.
(3)Humanitarianism.

四六
Novicow : Gaspillage des sociétés modernes, (p. 200-211) 「Exclusionisme」 Après 「intolérance, un de plus grands obstacles à l'accroissement de la richesse vient de l'exclusivisme national. Il s'est vit depuis quelques années avec une extrême intensité et semble encore aller en augmentant. Ce phénomène a pour sources principes le misoneisme, le cry sohedonisme et le eteohedonisme

幾近新攘夷主義の漸く高まり來れる如き描いて當れり。各地が日本移民を排斥し、尤もつあるが如き、新攘夷主義の適例を見べし。

主義といふ、宇内に於いて二個以上の社會が相駢びて繁榮するを不可能事と認むるは、皆共通なり。抑、帝國主義が宇内に於いて二個以上の社會が相駢びて繁榮するを不可能事と見做すは、遠き古より今日に至るまで、頗る事實に似たる者あり、然れども此不可能事たるは、果して理想なりや將た見在なりや、果して理なりや將た勢なりや。若し理想上不可能事なりとせば則ち可、若し見在的不可能事たるに過ぎずとせば、則ち帝國主義や見在を助け長ずる者にして、既に理想たり主義たるの價値なき者なり。夫れ二國相駢びて繁榮するの不可能なるは、實に帝國主義の流行あるを以てのみ、此主義の流行を以て此主義の必然且有理なるの根據と爲す、傳染病の流行を以て傳染病の必然且有理なるを立せむとするか。攘夷主義は尚消極的なり、帝國主義の及ぶ所、外來の壓迫の加はるに際し、成るべく其勢力の外に立たむと期する、攘夷主義の政策的得失は暫く論外に措き、企望としては亦已むを得ざる事と謂ふ可し。夫の積極的帝國主義に至りては、卽ち是れ此勢の作成者なり、何時までも宇内の秩序を致すべき確實なる餘他の方策を講ぜざらしむる所以となる者なり、乃ち帝國主義存立の責任は、全然帝國主義自ら之を負はざる可からず。之を要するに、從來優勝劣敗が國際の通勢なりしの事實は、毫も今の優者が今の劣者を壓滅して自國社會の膨大を計るの合理的辯解とはならざるなり。蓋し帝國主義亦段階あり、多少の制限規定の下に自國社會の

膨大を計らむとするは其相對的なる者なり、而して此制限規定の根據如何と問ふに於いて帝國主義は亡ぶ。

近時帝國主義が益、流行を盛にするの勢あるは慨すべし、是れ諸般の原由の夾雜に因るも、就中一二の國が此主義を實行するの近時益、急劇を加ふると、此主義實行の舞臺が近時交通の大進歩に由りて世界に向うて開かれたるとに坐すること大なり、諸國は一二の國の此主義の實行を以て自國に加ふる壓迫の爲に消極的に帝國主義を操るに至る、勢力範圍といふ語は、門戸開放といふ語と相駢び、近時世界大多數の國に向うて世界の某某地域は此主義の舞臺を供す、四七帝國主義と攘夷主義とが、單に積極消極の區別を以てする同一性質の者たるに過ぎざるを理解するを要す。

四七　此尤も著明にして大規模なる支那に對する歐米列強の態度方策とす。列強は帝國主義の爲に此勢力範圍に於いて攘夷主義を實行しつゝあり。

帝國主義にも亦政治的と宗教的との二種あり、政治的帝國主義は統治の權力の普及を期し、宗教的帝國主義は宗旨の權力の普及を期す。兩種の關係、國家統制上の問題に於ける專制主義の二方面の關係を察せば、思、半に過ぐべく、國際政策に對して、此兩種が最も結托を便とせし所以、亦明なるべし。而も專制主義は、宗教的には恒久なり得るの性質を有するも、政治的には然らざるより、世の進むや、二者の一致は漸く分解するを免れず、此に准して、進める世に於ける帝國主義、侵略主義は、漸く政治的、宗教的、兩種の一致を不便とするに至る。但し社會の對關に於ける帝國主義の統制は、一社會の內部に於ける統制よりも、專制主義を以てするの時期長久なるを以て、帝國主義に於ける兩種の一致は、普通の社會統制に於ける兩種の一致よりも較、長久なるを期するを得。

此一致の分解せる、後にも、亦此一致の成立せざる前に

も兩種各獨立して作用することは長久なり。政治的帝國主義は既に之を見たり、宗教的帝國主義は亦政治的帝國主義と同一の方式を以て各個社會の間に行はる。宗教は自個の信界に於ける最上者を信ずるに於いて成り立つ者なれば、宗教の存立せむ限り帝國主義は離脱するを得ず、宗教が博愛を教ふるに拘らず、世上最も偏執にして迷深き者は卽ち宗徒なること、是を以てなり。豫め宗教其者の內容に於いて、我宗教に執するは、既に我教旨にあらず と教ふる者[四八]に非ざれば、此弊は宗教に伴ふ必然の事件とせざるを得ず。

政治的帝國主義は、其初多く宗教と一致し、若くは相結托して其侵略主義を實行するも[四九]、其漸く時勢に適せざる

四八 流石に佛教は、特に其大乘教に於いて尤も熱心に之を說く、執といふことなかむ戒ること、至れり、憲せり、我法二執の辯、執取相の辯等これなり。

四九 三百年前切支丹の我國に於げる、今日露西亞の政策の如き、其適例なり。切支丹が醫術と合體し、純然たる巫醫の趣あり、殊に著明なる事實なりとす。

に及びては、更に經濟的帝國主義と變り行く。經濟上の趨勢に循ひ、其利益圈を擴張するは、各國立國の要義と認められ、其擴張の成就するに隨ひ、勢の乘ず可きあれば直に復た統制圈の擴張を逞うす、是れ經濟と結托する政治的帝國主義なり。今日の帝國主義は多くは既に純然たる政治宗教的帝國主義を離れて、大に政治經濟的帝國主義の方に進み、而も未だ全く其純然たるに至らざる者とす。[五〇]

第二、四海主義。　四海主義は正に帝國主義に反して、四海の內皆是れ同胞兄弟なりと爲し、相互に和親輯睦して來往すべく、國家の區劃は最もこれが障碍を爲す者なればとて成るべく其組織を簡單にし、國家に執着するの弊を脫離せむを期し、究竟は全く國家の畛域を滅却して、各

五〇 D. M. Robertson: Patriotism and Empire. 1900 愛國主義、軍國主義、帝國主義を論述せり。Fichte: Der Patriotismus und Sein Gegentheil. 1807 は人の好く誦する所たり。

五一 Cosmopolitan.

個人は直に宇内人[五一]として其天分を全うし、以て此世界を黄金世界と化せむを期すべしと謂ふ。抑、四海主義が四海皆同胞なりとし、紛爭鬪伐を熄めて和親輯睦を以て相交るを奬むるは、洵に美しき理想にして、人間の發達上正に希ふ可き所たり、然れども、これが爲に國家の畛域を滅却せむは、果して其希望を達するの要道なりや、寧ろ其希望に背反するの方法たらざるを得るや。四海主義の希望にして全く達せらるるか、宇内を小分して各方に對立する衆國家の畛域は、自ら其必要の去ると共に陰影の如く消散せむ、然れども由來國家の成立は、社會の進歩に於ける避く可からざる必要によりて來れる者、今俄に國家の畛域を徹するか、社會は直に再び舊時の無秩序に逆轉すべし、無秩序より一躍して四海主義の大希望に到達せむとするは空想のみ。且今日各國間に紛爭鬪伐の行はるるは、是れ各國が國家を有するが爲に非ざるなり、人の宇内に生存する、未だ國家あらざるや個人に於いて爭鬪し、既に國家あるや國家を以て爭鬪す、紛爭鬪伐は一面人の生存の方式たり、一面天の未だ人をして平和の滋味を解せしめざるが爲のみ。[五二]未だ國家あらざるや個人相互の間に於ける秩序未だ定まらず、既に國家ありて此秩序大に定まる、乃ち世界に於いて秩序を立て平和を成さむと欲する、國家を廢絶するの消極的方法よりは寧ろ積極的方法に賴らざる可からず、積極的方法にして確立するか、國家の存否は結局大體に關する所少きに至るべく、唯此方法の

五二 天果して人をして此滋味を解せしめ得るか。平和の滋味は天國の歡樂の如くふくみ、之を解し之を味ふの時は死滅の生存を意味するものに非ざるなきか。

實質を減じ負擔を輕うせむが爲には、國家の必要や毫も減退を見ざるべし。夫れ四海主義の大過は、其國家の畛域の存續に反對するに在り、此畛域に反對するの程度によりて四海主義に段階を生ず、此畛域の撤去、既に四海主義の爲に要件たらず、然らば何を以て其大希望を達せむかといふに至りて、理想として四海主義の本質乃ち亡ぶ。

四海主義、一名世界主義は國家の畛域を無用有害視して其一刻も早く撤廢に歸せむことを望む者なり、帝國主義は國家の畛域に據り自國を擴張して他國を併呑せむことを期する者なり、兩者の主義や、斯の如く全然相反するに拘らず、亦往往相一致するに難からず、是れ其故何ぞや、一に其究竟に於いて世界を混一せむことを期するに於いて、及二に其實理の示命に隨うて着着歩武を進むることを爲さずして破壞を以て空想を實行せむとするに於いて、相一致する所あればなり。夫れ空想の實行は必ず不合理を伴ふ、其擧や必ず破壞に出づるを致す、乃ち破壞主義たるに於いて帝國主義と四海主義とは正に相一致す。且兩者共に世界の混一を究竟とし、而して四海主義の希望、少くとも其名とする所の善にして且美なるや、帝國主義は往往口を四海主義に藉りて、曰ふ、我が世界を混一せむとするは永久の平和を建てむが爲なるのみと。[五三]而も特に他の國、他民族が同じく世界を混一せむとするを妨げて、特に之を我が特權に收めむには、更に特殊の口實を要す、之を供するに至便なる者、一を宗教と爲し、一を所謂

五三　歐人が其所謂文明擴衍を以て歐人自然の權利及要求と爲し、他民族を征服して爲に天賦の權あるが如く振舞ふは、亦これが適例なり。Prescott: History of the Conquest of Mexico, 尤これが好實例を供す。眼光紙背に徹する經國の士は須らく此書を取りて之を日本西教史と對照一番するを要す。

文明と爲す、何となれば、宗教は自個の所信を以て最上とし、此最上の所信を有する自個を以て現實世界の最上とする者、所謂文明、亦自個社會の文明を以て一切人間景福の理想的優勝と爲す者なればなり。卽ち帝國主義の四海主義との握手は、正に其宗教との握手と同一の效果を生ず。蓋し四海主義亦多く宗教家の口に出づ、宗教家の中、眞個に自個が受けたる天の寵命を重んじて天啓の福音を四海に弘通せむと努むる者あり、されど多くは是れ本末を誤り、宗旨の實を弘めずして宗旨の名を擴めむとする者、若し眞に宗旨の實を弘めむとするか、何爲ぞ其本質に於いて相若ける宗旨をも駁擊して餘力を遺さざる、又何爲ぞ汝の敵を愛するの宗教的教條に直徑的に背反して而も悔ゆるなき。凡そ宗教的帝國主義は、四海主義の看版の下に、往往にして驕僭を逞うす、帝國主義の牛馬走たるは洵に四海主義の光榮か、而して今の四海主義や乃ち多く此徒なり。[五四]

第三、人道主義。　帝國主義及四海主義の究竟の規定者は人道主義なり。宇内の各國は、其國家自體を以て世界に對する統制の權力を要求す可きに非ず、唯其域内に於いて人道の鞏固にして圓滿なる周行を期し、進みて亦宇内に於ける人道の周行を以て自ら任ぜざる可からず。夫れ道は一のみ、人道は宇内の各地に於いて二三なる者にあらず、各國が、自個に於いて、自個に由り、競うて人道の周行を以て己が任と爲すは、卽ち直に是れ宇内人道の周行を

五四　四海主義の吟味は、近時國際主義の實理的批判の起るに至りて頗る正核に近づけり。Th. Masaryk: Die phil. u. soc. Grundlagen des Marxismus. 1899. Nationalität und Internationalität (S. 426-454) マルクス及エンゲルスの論評し、四國際主義を實行的主義、國民主義及社會主義の關係を明せり。Ferrier は此問題を取扱へる第一人にして、人間社會は人爲的ならず、自然的に衆多の國民的有機體より組成せる、卽ち各國民は人間社會全體の各肢節なりといへり。

實現する所以なり。人道は如何にして之を求むる、亦唯實理の示命に仰ぐあるのみ。人道主義は、實理の示命に基づき、世界に於ける人道の扶植を以て國家社會の重大なる任務とし、之を以て國際關係の規定と爲す所の理想なり。是故に人道主義は、斷じて國家の滅絶するを希はず、國家の滅絶は是れ其主義の主體の滅亡にして、やがて其主義の滅亡を意味すればなり。人道主義は必ずしも干戈を辭せず、兇暴を征して殘賊を誅するは、是れ人道の扶植に於いて避く可からざればなり。必ずしも興利を域外に求むるを辭せず、人道は決して社會の生存の要件と背馳する者に非ざればなり。必ずしも國家權能の一部の一時協働を辭せず、國家の存立に害せずして衆國家の協同して人道の扶植を計るの場合、亦全く之なしとす可からざればなり。人道主義の期する所は、國家を介する公道の發展是のみ、其私に徇ふは其最も惡む所なり。

人道主義の所見斯の如し、乃ち今日各國の現狀競うて帝國主義を執り、僞の文明の名に於いて、猜險狹隘なる宗教の名に於いて、弱を壓し暴を擅にするに對し、其取る所の方針や知る可きのみ。若し之に對して我亦帝國主義を取る可しとする者あらば、是れ所謂暴を以て暴に易ふる者、正正堂堂、名正しく事美に、群醜をして辟易懼れ畏るる所を知らしむる者、人道主義を措いて將た安にか之を求むる。

帝國主義を呼ぶに霸道を以てし、人道主義を目するに王道を以てする、亦妨げず、但し古の王道、之を今日に行ふ、卽ち人道主義なるも、支那の所謂王道は、當時の實狀に隨うて、甚だ諸外國を認むるに至らざりき、耳食の徒の迷を惑くの虞なしとせず、本文の命名に隨へる所以なり。

國際上の理想に關しては、歐西の學者も亦既に現時の虎狼に不平

五五 Fonille: Sc. soc. cont. 耶蘇教の四海主義の迷謬を辯じ(P.326)眞のフラテルニテは宗教的なる者に非ず、全く實理的にユマニテの知識を須ちて成立すべし(P.329)と論じ、而して此結果は正義(Justice)卽權義の關係)とフラテルニテとの合成により大成す(P.419)と謂ぜり。

なるあり、フィエエ、バックス[五六]の徒、痛論到らざるなく、スペンサルの如きは今日歐洲の狀態を以て野蠻來復[五七]と名づけて之を斥けたり。大凡そ社會大觀の學に從事する者、殆ど皆現時各國が國際上執りつゝある政策の趨勢に顰顣す。開國以來正大光明の理想を以てせる北米合衆國が奴隷解放を以て、其南中を通過し、西米戰爭、比律賓の獨立戰爭に於いて、乳虎の始めて血を舐れるが如く、漸く其虎性狼慾を現し來れるは、吾が最も痛惜する所なり。[五八]

第八節　社會の生活に於ける理想

社會の生活は社會成分の生存を意味す、社會の生活に於ける理想は卽ち經濟上の理想なり。經濟上の理想に三類あり、左の如し。

第一、私產主義。

第二、共產主義。

第三、社會改策主義。[五九]

第一、私產主義。　私產主義は一名經濟的個人主義と稱せらる。大凡そ生存の資用の取得は各個人を中心とすべし、個人にして皆充分なる生存の資用を得るあらむか、是れ所謂家給し人足る者にして、社會生存の要件は玆に具足す。財產は固より私產卽ち私有財產ならざる可からず、經濟上各人の力む可きは各個の私產を增大するに在り、私產の增大は自由競爭によりて成る可し、經濟社會は私產の爲にする自由競爭の場たるにて完全なりと謂ふ、是れ此主義の大要なり。私產主義が家給し人足るを以て社會經濟の理想と爲すは洵に可なり、私產と自由競爭と、亦

五六　Bax, Religion of Socialism. P. 123—127. Imperialism and Socialism. 氏は一八八五年に此短篇を書きて、近時歐洲各國は嗜民熱に擺り、所謂 "Unoccupied countries" を取り "Protectorates" を打建てむとし以て "The rivalry among the nations for their share of the world market" となせりといふに筆を起せり。蓋し氏の之を草せしは、ナイルたる秋に在りし、遠征の失敗の報を得氏の此文の如き、短篇と雖も有數の文字今其一節を抄す。

War, jingoism—otherwise patriotism—are indeed past sure while the economic basis of society remains unchanged, but only so far; and hence we call on all sincere friends of peace to leave their tinkering "peace societies" and (議論少しく偏せるも聽く べし) work for socialism, remembering that all commercial wars—and what modern wars are not—directly and indirectly commercial?—are the necessary outcome of the dominant civilization. We conjure them to relect that such wars must necessarily increase in proportion to the concentration of capital in private hands, *i.e., in proportion as the commercial activity of the world is intensified, and the need for market keeps more pressing.* p. 124.

五七　米國時情の變遷及近時列國殊に其國際政策の眞相は、一九一二年の末に公拙著「世界列國の大勢」之を詳にす。

五八　Rebarbarization.

五九　(1) Economic individualism.
(2) Communism.
(3) Economic Socialism. Social Politics.

必ずしも家給人足に妨なからむ、而も一切の規定を除斥して飽くまで私産を張大せむとし、飽くまで自由競爭に任ぜむこと、是れ果して家給し人足るの境地に達する所以なるか。近世各國の經濟社會は、産業の發達するに隨うて益〻私産主義の方法が家給人足の境地に緣遠きを證明す。絶對なる私産制と無制限の自由競爭とは、唯少數者を餘有るに惱ましめ、而して大多數の人をして足らざるに苦ましむる所以なるは、事實之を證明し、學理之を確說して、毫も疑を容れざる所。是れ何を以て然るか。抑〻社會は體制を有し、これが各部に當る各個人は、離れ離れに其事を濟す者に非ず、乃ち彼經濟機關に於いても、體制の複雜を加へ完全に發達するに隨うて各個の相依りて存立する所以の益〻彰著なるに進む、然るに私産主義、卽ち個人的自由競爭主義は、此相依り相待ちて存立する所以を認めざる者、是れ此主義が産業の發達に隨うて益〻其弊を現す所以なり。私産主義亦漸く多少の制限を財産私有と自由競爭とに加ふるの必要を認むるに進む、而して私産主義の段階は生ず。此規定の基礎如何の詮議は、私産主義の外に在り、而して私産主義は亡ぶ。

第二、共産主義。　共産主義は正に私産主義に反對して近世産業社會の百弊を以て全然財産私有と自由競爭との結果に歸し、此兩者を全廢し、社會人衆全體の生産は之を全體の收得と做し、其需要に隨うて平等に之を衆個人に分配せむと期す。此主義が需要に隨ふの平等的分配を

以て社會人衆の經濟的取得の標準と爲すは、沒す可からざる所にして、私產主義が漫然として家給人足を夢みたるに比すれば確に一歩を進めたる者と謂ふ可し。されど財產私有と自由競爭との全廢は果して直に此目的を達する所以なるか。生產は勤勞の結果なり、勤勞の動機は果して單に主他的動機を以て充分なりとす可きか。社會事物の改良進歩の立功立名の動機にも本づくは最も明なり、今全く此等の動機を杜絕し競爭の途を塞ぎて、以て社會經濟の進歩を來す可しとするか。且右二點の弊は未だ甚だ大ならずとするも、共產主義に於ける分配の、方法上一大問題たるを如何にすべき、卽ち共產主義は、此分配に對して善良なる標準を示したると同時に、更に其方法を

六〇 本著第二卷社會理學第三篇第三章參照。

示すの責任ある者と謂はざる可からず。蓋し斯かる分配の方法は、人口少數なる社會に在りては、格別困難なる問題とならず、例へば一家の裏に在りて日用の衣食及雜品の分配はさまで問題となることなし、而も遺產の分配に於いては既に幾多の問題を生ずること、屢見る所の如し。乃ち今日幾千萬の人口より成立する社會に在りて、分配の方法如何は、今や分配上唯一の問題と謂ふを妨げず、此方法の明示なき限り、共產主義は未だ主義として成立するの資格なき者と謂はざるを得ず。此方法の探討に困難して、遂に幾分か現時の經濟組織の下に其標準を實行せむとする者起り、共產主義の段階は茲に生ず、而して共產主義の本體は茲に亡ぶ。

第三、社會政策主義。斯く善美なる分配の標準を、社會の體制によりて實地に見むと期する者、是れ經濟的社會本位主義にして、通稱を社會政策主義といふ。謂へらく、社會の生活の要件は、少數者が莫大有餘の私產を積むを期するに在らずして、最大多數者が不足なき生活の資用を取得するを期するに存す、一人生活の資用に不足なる者なきに至るは、是れ社會生活の理想なり。此理想を實現せむには社會の體制に協合するを要す、社會の體制を破壞するは決して此理想を實現する所以にあらず。生活資用の不足に二樣あり、一は主觀的不足なり、二は客觀的不足なり、自個の希望に比して其見に有する所の不充分なるは是れ主觀的不足なり、他人が有する所に比し自個の有する所に顧て不充分の感あるは是れ客觀的不足なり。社會經濟第一の要件は、先づ社會人衆をして主觀的不足なからしむるに在り、是が爲に產業の進步起り、而して是が爲に經濟社會は愈〻益〻複雜に發達す。第二の要件は人衆の客觀的不足を除去するに在り、卽ち成るべく生活の資用の平等的分配を期するに在り、是が爲には財產私有に加ふるに適當の制限を以てし、殊に人の先天的所得とも謂ふべき相續贈與等の如きものに適當の制限を加へ、遊民の弊を防ぎ、併せて財產の平均を奬むるが如き種種の政策は存すべし。然るに私產主義や此主觀的不足の救濟の要件たる動機を認めて而も體制に及ばず、客觀的不足の救濟は則ち全く之を認めず、共產主義や、主觀的不足の救

六一　個人的相續ないふ、家督は卿り別問題に屬す。

濟は全く之を認めずして偏に客觀的不足の救濟をのみ是れ急ぐ、二者共に極めて不完全なる經濟上の理想たる所以なり。社會政策主義は最も社會體制に重を置き、社會の渾一的經營を基本と爲し、主觀客觀兩面の不足を救濟して以て經濟の進歩を計らむと期するの理想なり。所謂社會政策は、實は其中樞に於いて社會的經濟政策にして、流俗に亦此主義に據る行動方策の各目とせらる。

社會主義の稱、從來廣汎に過ぎ、曖昧に過ぎ、濫妄に過ぐ、茲には共產主義を以て從來尤も多く用ゐられたる社會主義の稱呼を以てせる意義に充て以て嚴密なる學語上の區別を成せり。廣義に於ける社會主義の義解中、全然共產主義の意義を除却せむか、所謂社會政策主義亦此と矛盾することなく、其意義內容や殆ど所謂國家社會主義に近きも、唯經濟的社會本位主義や、必ずしも國家の力を以て社會主義を實行するに限らず、一般に社會體制、社會渾一體を重んずるの結果、國家機關は其至大なる一部なるが故に、國家の權能を重んずる國家社會主義と大に相近きを致すのみ。社會主義の目はオオエンに始まり、バベウフ、カベエ等は社會主義と號せず、學語として廣義社會主義の名目は太だ價値なし。若し夫れ社會體制の實質上の理想、及個人的なる、行爲の效果上の理想たる社會本位主義は、固より經濟上の社會本位主義とは、相混ず可からずして、而も相繫るものたること明白なり。[六二]

廣義社會主義の內容分析、經濟上の理想的取扱等は、文獻眞に汗牛充棟なり、[六三]其大體の取扱は既に經了せる所とす。[六四]

第九節　社會の修養に於ける理想

社會の修養は社會が其成分を通じて自ら修養することと卽ち是なり。社會の修養に於ける理想は卽ち敎化、敎育

六二　格格格格法律上人格人無人＝觀念の發達沌渾人及事實法

六三　Gemeintum ——
Eigentum ——
Gemeineigentum ——
＝財產觀念の進化及事實

六三　Eugène Rostand: L'Action sociale par l'initiative privée. 2 vols. 1895. 氏は社會主義者の所業の社會の進歩を妨障するを論じ、主として社會政策によりて社會の進歩を致さむと期せり。

六四　本書第一卷社會學序說第二篇第三章第二節參照。

上の理想なり、之を三類に大別す。

第一、注入主義。

第二、開發主義。

第三、獨立主義。[六五]

第一、注入主義。　謂へらく、人の猶幼なる、天賦に何等の有する所あらず、其前途の開展は擧げて教育の如何に關す、教育は此本來無一物なる空虛を充たすの謂なるが故に、教育の要義は唯外來の注入に存す、注入して懈らざる、充盈は期して待つべしと。抑、注入主義が人の運命に於ける教育の至大なる效果を認めて、人間の前途は殆ど教育によりて決せらると爲せるは、誰人も異議なき所なるべし、而も其說に於いて疑ふ可きは、第一に、初生兒は果して

六五 Passivism, activism, Realizationalism ともいふべし。

絕對的に無一物なるか、卽ち其教育せらるべき事項について果して何等の先天的所得をも有せざるか、第二に、假令へば無一物なる空虛を充盈するに、果して所謂注入によりて之を成す可きか、他に更に效果ある方法の存するなきか、此二點は注入主義に於いて充分疑を挾む可き者として存す。第一疑義に關して、進化論の所說は既に之を否認す、種族の經驗の積聚によりて人間の本能は生じ、且之を遺傳す、原人と雖も其祖先以來の經驗の積聚を有す、是れ或は人たるの賦性に於いては無一物といふを得むも、既に人類として數萬千年の世代を有する後裔は、必ず先天的の賦性を有す。但し是等は、本能を除くの外、多くは實質的能力に非ずして唯形式的能力なり、故に智育に於

いては如何なる嬰兒も皆其實質を後天の教育に待たざる可からず、唯既に此先天的能力を有す、乃ち幼兒が外界より受くる自然の經驗は皆教育の效果を生ず、而して彼空虛なる形式的能力は、人の成長に伴うて次第に實質を充實し行く、されば幼兒生れて既に若干歳、最早自個に於いて、形式實質ともに斷じて無一物に非ず。第二に教育の目的を達するに注入を以てするは、全く無一物なる者に對する一刹那には或は可ならむ、此刹那を一轉過せむか、既に目して無一物と謂ふを得ず、斯く既に多少の所得ある者に對しては、甲、教育は斷片の聚積に非ずして發達せる人格の修養といふ一個渾一的の事項なるが故に、其各部は完全に渾融調和せざる可からず、乙、教育を受くる者亦固より一個の渾一體なるが故に、支離滅裂なる教育は到底之を享受するに堪へず、此理を以て舊所得と新所得との間に於ける充分完全なる渾融調和は教育の必要件なり、此要件は注入の得て達する所に非ず。是故に注入主義は根本人性の考察に於いて既に誤り、其手段に於いて亦誤る。但し注入主義亦段階なきに非ず、其段階は先天の賦性に顧て渾融調和に注意するの多少に本づく、而も此渾融調和の標準は固より之を注入の外に求めざる可からず、是に於いて注入主義は亡ぶ。

注入主義の附隨的一特質は、常に新所得を自個以外に求むるに在り、此點個人に在りて教育上の注入主義となり、社會に在りては模倣主義となる、共に同一の過誤に坐し、依地主義の思想に應ずる者なり。

第二、開發主義。　開發主義は正に注入主義に反對して、

謂へらく、人間の教育は、世俗の想像するが如く、外より或者を將來して之を被教育者に附着するにはあらで、唯被教育者が内既に有する所の者を開發するに止まる、教育は善く此義を體して人の子を賊するが如きことある可からずと。開發主義が注入主義の弊を脱して、被教育者が内既に有する所の者を開發せむと期するは、卽ち是れ渾融調和を得る所以の方法にして、教育の實用を效すに於いて要領を得たる者と謂ふ可し、然れども幼兒は果して悉く其が將來に造詣し得る所の者を先天的に具有するか、何の方法か能く之を證明する、若し之を是認せば個人の經驗は種族の經驗に向うて何等の附加をも成さずとせざるを得じ、若し果して然りとせば更に此先天的所得の由來は何によりて之を證明す可きか。則ち這般の説明の確ならざる限り、開發主義は自家撞着にして、奇態にも注入主義と同樣に進化論の種族經驗觀を否認するの弊に陷るもの。且更に之を教育の事項に徵するに、教育は社會の理想に應じて個人を化導するを以て精神とす、然るに所謂開發にのみ依賴して只之を遂行するに急なるときは、是れ見在に殉して理想の加ふ可き餘地なきもの、乃ち開發主義は亦直に教育の精神を失ふ者なり。但し開發主義亦固より段階あり、其段階は先天的賦性を以て絶對的に完全なりとすると否とに倚繫す、先天的賦性不完全にして多少後天の附加を待つとせば、其區劃如何、是れ既に開發主義の圈外に出づ。

開發主義の個人に於けるは、國粹主義の社會に於けるが如し、但し國粹主義は社會之を唱へ、開發主義は被敎育者之を唱へず、故に理想主義としての要求に大なる逕庭あり、隨うて開發主義に對する多くの非難は、之を國粹主義に加ふ可からざる者とす。

第三、獨立主義。　上述二主義を考察する究竟問題に觸れて此に解決を與へたる理想は獨立主義なり。謂へらく、實理の示す所に據れば、種族の經驗は個生物の先天的賦性を形成し、個生物は此賦性あるが爲に個體的經驗を成し、以て種族の經驗を倍加す。さて此先天的賦性は後天的經驗を可能にする必要件にして、而も後天的經驗に由るべき一切の所得を包有する者に非ず、是れ卽ち個人が敎育せらるべく社會が敎化に待つある所以の根柢なり。敎化は社會が自ら修養する所以にして、社會の理想に應じて個人を導く者なり。理想は人的なり、必ずしも自然的なる見在と一致せず、社會より見て人を敎育する、敎化の目的は正に斯の如し。敎化を受くる個人は、如何なる性格に造る可きか、彼は社會の內に在り、社會の成分たる個人となり、種族の賜物、卽ち社會の賜物なる自個の先天的賦性を基礎とし、敎化に由りて發展成長し、遂に社會の水準に達するに及びては、自個を以て自個を敎育し得べき完全なる獨立的性格を得るに達す。更に進みて社會の水準以上に達するや、乃ち社會を敎化して社會の水準を己と同等にまで高めむことに盡瘁するに至る。敎育を受くるの初より其自個敎育の終に至る、其間舊所得と新所得との間に終始渾融調和を保持しつゝ進行するは固よりなり。

是故に教化の理想は社會の理想に應じて完全なる獨立的性格の養成に在り、之を達せむが爲に、智情意を以て分たば最も智育に於いて、時期を以て分たば最も少年期に於いて、較注入的方法を參用するも可なるべく、究竟舊所得との間に完全なる渾融調和を必期すべく、且先天的賦性に應じて能くすべきたけ多方の實質を供給するに力むるを要す。斯の如きは是れ獨立主義の教化理想にして、固より實理を基礎とせる大觀的理想なり。

社會の修養は、斯かる教化を基礎的事項として造詣を期す可き者なり。教化にして社會に關係なきか、其名を僭する者、教育にして社會に關係なきか、貴ぶに足らず、社會にして教化を重んぜざるか、其修養は到底期す可からず、修養なきの社會は進歩なきの社會なり。然らば則ち社會修養が達せむと擬する究竟の理想如何、次節に之を觀むを要す。

教育主義の變遷は教育史の詳述する所、[六六]而も其根柢は根本理想の變遷に本づく。注入主義を排して開發主義を取る、ヘルバルト派、スペンサル、ペイン等皆これに就けるが、獨立主義は尚僅に所謂開發主義の中に點在して充分の發展舒暢を得るに至らず、共產主義と社會本位主義との分離が經濟上の理想に大なる進歩を效果せるが如く、今や開發主義と獨立主義との分離を以て教育上の理想に同樣の進歩を致すを要す。自個實現といふは頗る獨立主義の意義に近きものなるも、其名目の明瞭を缺くを弊とす、是れ個人的意義にて自個といふ、必ず實現の要素の闕缺あるを免れざればなり、自個實現は社會にして始めて之を言ふ可きもの。近者コンシデラン、[六七]及ロスタン[六八]の見解は、幾分の光明を此問題に與へたる者に似たり。

六六　Paulsen: Geschichte des Gelesrten Unterrichts.
Compayré: Histoire de Pédagogie 等汗牛充棟なり。

六七　Victor Considérant: Destinée sociale, III. p. 43)—時代によりて教育主義を區別せり。
1) Education passive: 2) Ed. active: Emitation de l'enfant à la vie sociale industrielle. 3) Ed. active: application: pleine entrée de l'enfant dans la vie sociale industrielle. とせり。

六八　Eugène Rostand: Le Progrès social par l'initiative individuelle, Paris, 1895. 純然たる獨立主義の教育思想を掲ぐ。ロは氏が(Comité de Défense et de progrès social と共ふ協會(Patrie, Devoir, Liberté を綱領とす)に於ける演說なり。

第十節　社會の職分に於ける理想

職分を盡さむこと、是れ個人に於けるが如く、亦社會に在りて其修養究竟の理想なるべし。社會の職分と謂ふ可き者、在りや、曰はく在り、所謂文明なる者卽ち是なり。文明の實質は今之を論ぜず、社會の職分に於ける理想は卽ち文明上の理想なり。文明上の理想は之を三類に大別す。

第一、模倣主義。

第二、國粹主義。

第三、參贊主義。[六九]

第一、模倣主義。謂へらく、凡そ社會の經營に於いて最も戒む可き弊套は、個人の修養に於けるが如く、慢に在り、驕に在り、自負に在り、自ら足れりとするに在り、社會經營の第一要件は他國の長を取り自國の短を補ふに在り。自國にはあらゆる短所を電睨熟察し、他國にはあらゆる長所を穿鑿し來り、之を以て自國に移し以て自國の短を補ふ、是れ社會進步の必要且十分なる要諦にして、這般他國の長所を自國にも擴充する、是れ一社會が乃ち宇內の文明を翼贊するは、喩へば猶使徒の宗敎に於けるが如し、使徒は神を作らず、唯神の道を遠近に布くに力む、國も亦然り、國は文明を作らず、唯文明を取りて先づ之を自國に布き、行うて餘力あるに於いて之を更に後れて進む所の諸の社會に施くのみ

六九　Imitation, Nationalitism, Perfectionism ノ譯セシナリ。

と。斯くて此主義の所業は全く模倣となり了す。模倣主義は社會に戒むるに痛く自負驕慢の節す可きを以てす、洵に可なり、謙受益は人道の通義なればなり。而もこは果して必ず他を以て優者とするを伴ふか、理想を自個に求めず、亦第三者に求めず、必ず之を他に求む可きを伴ふか。且此主義は社會の自ら文明を作爲するに力むるを無用とし、他の社會が既に成し既に有せる文明を採りて之を他の社會に布くを期すべしと謂ふ、然らば則ち試に問ふ、其所謂先進國の文明なる者は果して如何にして發生せる。是れ亦更に其一段の先進國の文明を模倣せる者なりといふか、乃ち逐次上に遡り、究竟の先進國、其文明をいつれより模倣し來れる。或は遂に文明の究竟的原始を神の特寵ある天啓に歸せむとするか、宗教家の我執には洵に太佳なるべきも、昭昭たる史迹は之を非認するに於いて毫も忌憚するなきを奈何にせむとする。且模倣主義は、匿證佯爭を以て、自國には短所あり、他國には長所あるを前提するも、同一範疇に於いて自國の事物と他國の事物と相容れず相兩立せざるに於いて、直に自國の事物を短とし醜惡とし、他國の事物を長とし善美とするの根據は安にか在る。凡そ模倣主義の根據なきや、脆弱甚たしく、朽を拉するに似て、また論難攻擊を要するに堪へず、唯此主義の斯く脆弱無根據を極むるにも拘らず、世間には一時盛なる流行を來すことあるは、是れ半開人の間に最も屢見る所の社會的病的現象の一たるが爲にして、此見地よりし

て特殊研究を値する者。但し模倣主義と雖も亦多少の段楷なきに非ず、こはせめて其所謂採長補短を勵行すると否とによりて岐る。絶對的模倣主義に至りては、採長補短の綱領すらも全く之を忘却し了す、今若し眞摯に採長補短を勵行せむを期せむか、二個の問題は必ず生ず、長短判定の標準其一なり、採補の程度の標準其二なり、此二項の決定なき限り、上に掲げたる彼我相違の場合の決定は不能に歸す。世の論者、其較、眞面目なる者も、亦唯漫然採長補短を口にし、以て究竟的判定の標準を得たりと爲して疑はざるが如きは、乃ち頭腦の不健全を表する者なり。

七〇 アリストテレエス曰ふ、人は驚愕よりして哲學的思索を始むと。驚愕と恐怖とは、尤も敎へ、半開人は模倣主義の陷に陷る。

第二、國粹主義。　國粹主義は正に模倣主義の反對なり、謂へらく、一國が自個の特粹を發揮するは乃ち世界文明に貢獻する所以、在來の特粹は之を保存し之を發達するを要し、未だ有らざる者は亦新に之を生育し之を發達せざる可からず、濫に他國に模倣するを是れ力め、外邦の事物を移植するに是れ急なるは、飢者の食を擇はざるが如く、非常の事として時に或は之を看過すべしとするも、以て世界文明に對する功勞と認む可きにあらず、世界文明は爲に一毫の增進を見るなきなり。凡そ一社會が世界文明に寄與する、必ず自ら新なる創造を成すを要し、此新なる創造は各國の特粹を以てすること最も順當にして且容易なり。各國が其國風に於ける著大なる種別あるを患へて之を混一せむと悶するが如きは、人體を以てモネラとせむとするに類す、這般の種別は益、之を助長して以て

多趣多樣なる寄與の世界文明に向うて生出し聚中するを期す可しと。抑、國粹主義や、殊に列國對立して帝國主義又は僞四海主義の跋扈し易き現今の時勢に在りては最も機宜に適するの理想たり、且其本旨亦一國の特長を育成することを以て新なる進歩に順當且容易なりとし、新なる進歩を以て世界文明に對する眞個の寄與なりとするは、實に不易の定理にして、模倣主義の根本誤謬は玆に全く消滅に歸せる者。但し宇内既存の文明を取りて之が適用の範圍を擴むるは、全く無效といふを得じ、成形的文明を取りて其まゝに之を適用するや、範圍の廣きを致すとも、些些屑屑顧るに足らず、而も新なる進歩の資料として之を適用するか、其功決して看過を許さず、是れ國粹主義の段階の岐るる所にして、絶對國粹主義は此の如きの功をも認めず、純然たる自國の發生に非されば以て世界文明に貢獻するに足らずと爲し、相對國粹主義は、資料若くは形式の一部を他の社會の造詣に得たる者の功をも認む、隨ひて國粹の包含に廣狹の差別を生ず、絶對なる者は大綱に於ける特有事物に非ざれば以て國粹と爲すを肯せず、相對なる者は細目以下の特有なる發達も以て國粹と爲すに躊躇せず、卽ち屬性上の國粹をば本體上の國粹と共に之を認む。[七一] 相對國粹主義は絶對國粹主義の歩武を緻密の方に進めたる者にして、分析一歩を進む。[七二] 斯くて相對國粹主義の分析取舍の標準は、更に存する者なかるべからず、而して是は國粹主義の範疇以外に出づ。[七三]

七一　家族の外、制度の我國に絶對なる國粹論なり、西洋雅趣にして、特有の家族なるも、美術すなはち美と術、遊戯、特有の制度なるも、等しく我國粹に特有なる相對論なり、相對論にして、我國粹に特有なる制度なるも、共に體制上の國粹なるに過ぎず、天下の國粹は、相對的の國粹なり、故に言はゞ、國粹は、絶對的の國粹なり、故に言はゞ、國粹は、絶對的の國粹なり、故に言はゞ、國粹は、絶

第三、參贊主義。參贊主義は卽ち更に大觀せる社會職分上の理想にして、國粹主義と同じく、各國が自個の特粹を或は保存し或は育成し更に益〻之に發達を加ふるは、卽ち宇內文明に寄與する所以にして、社會の職分は決して之に離るること能はず、但し此保存育成の上に發達を加へて以て宇內文明を進捗するは、本末輕重の順序は之有りと雖も、必ずしも自國の事物にのみ限局す可きに非ず、乃ち他の社會に保存し來れる、若くは育成せられたる事物と雖も、苟くも力の及ぶあらば、嚴正緻密なる批判吟味を加へて之を發達し、以て宇內の文化を助成するは、亦是れ社會の宜く力むべき所なり。且夫れ輓近世運の進めるに隨うて、宇內各社會に共通にして解決を要する問題、宇

七二　故に今日に於いても資料として外邦の事物を取るは反對せずは、但し外邦の事物を唯我が資料たるに如止まる故に、之に變化し、尤も精密なる批判を加へ、之を有用なる消化物たらしめ、經濟的、國際的、項目に差別ある事は勿論なり。

七三　F. Schmidt-Warneck: Die Notwendigkeit einer Sozialpolitischen Pädagogik. 1885. 夙に Volkheit und Volkhaftigkeit を論じ National geist の說あり、氏の著書皆此主義を持す。

內に偏通にして發達を要する事項は、益〻其數を增し其範圍を大にするの趨勢なるが故に、單に社會內部の事物のみに着眼を凝らすは、將來に於ける社會の大職分の大成就を見る所以に非ず。之を要するに社會の職分は、宇內の事物に對し、實理の示命に基づきて、之を進捗發達し、以て宇內の文明の進步を計るに在り、是れ卽ち人道に由る人道の發達なり。これが順序として、又これが要件たる自個社會存立の要件として、自個の特粹の保存育成及發達の必要は、固より論を待たず。若し夫れ模倣主義の迷妄の如きは、國粹主義既に之を破碎し去りて遺憾なし、復た一言を費すを要せずと、之を此主義の大綱と爲す。人道に由る人道の發達は、古者聖人天地の化育に參贊すると同一義

なり、故に此主義に下すに暫く參贊主義の名目を以てす。

文明上の理想は、今日の歐洲に在りて甚だ問題とならざるに反し我國にて最も重要なる問題として識者の解決を待ちつゝあるは、吾が遺憾とする所なり。此問題の重要の最も痛く感ぜられしは、百年前の獨逸と爲す、而して其正當なる解決は、有形的獨逸帝國の建設に先だつこと半世紀、獨逸帝國の無形的建設、夙に成りて、以て今日富强の基を成せる者、ギョエテ、シルレル、レッシング、ワグネル、バウムガルテング、ロップストック、ヘエゲルの諸賢の功、亦偉なり。露西亞は則ち彼得大帝に於いて其解決を了し、英佛の如きは未だ曾て此問題の重要にも遭遇せざるなり、蓋し大陸諸國は、交通今日の如くならざるに當りても、尙頻繁なる社會事物の流動の免れざるを以て、不知不識の間、能く共通連底の改良進歩を見るを得、激動變革を要するの事例の甚だ乏しき所以なり。夫の大島に國する絶東帝國に至りては、其事情、正に之に反す、是を以て或は大化、或は明治、時時の激動を以て急劇なる局面の振蓋を見る、亦已むを得ざるに出づ、但向後交通既に四海に洽きが故に、斯の如きは最早三たび之れ有るべきにあらず、而して文明上の問題は、惟ふに之を以て最後の解決を爲すべし、識者の之に與る者、愼思明辨、以て過誤なきを期せざる可けむや。

第十一節　結論

上來の說述によりて社會的理想の大綱は粗、明了せりとす。夫れ實理が示命する社會の理想は如何なる者ぞ、今之を約すれば左の如し。

實理が示命する社會の理想は、其根本理想に於いては依地主義自依主義を排して大觀主義を取り、人間行動の標準は功利主義本心主義を辭して實理主義を取り、行爲の效果は主我主義主他主義を去りて社會本位主義に就き、而して人生觀は樂天主義厭世主義を陋として進歩主

義を取る。其社會の經營に當るや、社會體制の形式は階級主義平等主義を排して秩序主義を取り、體制の實質は個人主義國家主義を排して社會本位主義を取り、社會運營の方式は急進主義と保守主義とを排して進步主義を取り、運營の實質は大體放任主義干涉主義を非として實理主義に據る。實理主義に據れる社會運營の理想は、政治上には專制主義と自由主義とを排して立憲主義を是とし、國際上には帝國主義四海主義を斥けて人道主義を立し、經濟上には私產主義と共產主義とを去りて社會政策主義に就き、敎化上には注入主義と開發主義とを未可として獨立主義を樹て、而して文明上には模倣主義を斥け國粹主義を進めて參贊主義に至ること、斯の如し。[七四]其一貫せる實理の示命に由るの理想たるは特に擧示すべき所、他の排斥の運に逢へる衆理想は、皆一貫を缺く、是れ實理に基づかざるの弊なり、故に獨り其範疇內に於いて弊を見はすのみならず、其精神を以て他の範疇に臨むや、枘鑿の弊を見ること數なるは、固より其所なり。

斯實理的理想の體系は、上述を以て最も根本的なる者を擧せるに過ぎず、劣位なる衆多の小理想、其各項の下に屬し、大小諸般を併せて、體系は成立す。但し玆に立せる衆理想は卽ち諸〻の小理想の根本なり、直接に、渾一體なる社會の渾一的研究に竢ちて以て立ち、各個の小範疇を取扱ふに先だちて決せられ、實に各個社會的學科の原理にして、正に斯社會學の取扱に屬せる者、而して以下の小理想

七四　試に近時歐洲學者の社會的理想を擧げて比較せむ。V. Considérant: Politique positive, p. 29.—Le but le plus elevé et le plus raisonnable qu'il soit possible à l'intelligence humaine le poursuire aujourd'hui sur la Terre, c'est la Réalisation de l'association universelle des Individus et des Peuples, pour l'accomplissement de Destinées de l'Humanité.

は乃ち各個社會的學科の取扱に入るべき者なり。

出現の先後は社會現象の進化を意味せず、社會的進化は理想の判斷に須つ。今や理想既に立ちて、社會靜學の造詣亦社會進化の記述たるに堪ふ。

第三篇　文明論

第一章　文明汎論

第一節　緒論

社會動學は社會進化の實理を追求する者、凡そ社會の根本的研究は、其渾一的研究たるを要するも、其之を離ることの難きは就中最も社會動學に於いて著しとす、乃ち故らに分析抽象を施し、理を求むるに於いて社會理想論を成し、勢を見るに於いて社會進化論を成せるも、彼此相互の關係は融然たる合一に於いて了す可き者、今や兩篇の後、更に文明論の一篇あるは、卽ち其綜合の緊節を捉へ

て、以て社會動學の總束と作さむとする者なり。

普通社會學は、社會學體系の大體を把持して全般的知識を表明するを以て目的とする者、而して其包含には社會學實論の事項なし、而も學問の目的や、實地世界の經營に對する實理的示命を供するに存し、社會學體系に於いて社會學本論の地位は殊に然りと爲す、乃ち普通社會學の末篇が宜く本論と實論との連鎖を與ふる者たるべきは最も學問の生命に於ける必要事とす。今文明論は即ち此性質を有する一篇の議論を說述して、正に復本著全體に對する結末を供し、實理と實地活用との端を發くに當る者なり。

從來の社會學上の著述、記述的社會學が實地上學問の生命に注意せざるは更にも言はず、則ち實理的社會學と稱す可き者と雖も、其論旨の駁雜なる、其敍述の繁冗なる、往往にして其大目的たる實地と實理との關鍵を懈る者なきにあらず、本著は力めて統理を事とし、抽象に由りて篇章を次第し、以て簡明と整齊とを期したるが故に、其結末は自ら此種の一篇を以てするを要し、而して其體貌をして有終の美を濟さしむ。

文明論は三章を以て構成す、文明の意義の論を以て筆を起し、其論定を經て乃ち所謂現時の文明なる者の觀察に入る、之を第一章とす。所謂現時の文明や、實に社會の窮无き變遷の一節に名づけたる、者、乃ち其觀察は先づ其由來の考察より始めざる可からず、之を社會進化の史觀と爲し、第二章と爲す。由來の考察既に了りて、乃ち現時文明の評論に進み、以て文明論を了る、是れ第三章なり。斯の如

くにして文明論は能く實理と實地との連鎖と爲り、社會動學に於ける理勢の結節と爲るを得べし。

從來文明を講說せるもの頗る其人に乏しからず、而も文明を科學的分析的に攻究して其概念を明確にせむと力めたるものは太だ罕なり。フェルガッソン、[一]ラッツェンホオフェル[二]の如き、儻くは以て其頗る成功せるものに數ふべきか。クロシアル、[三]アダムス[四]の如き、フンクブレンタノオ[五]の如き、ユウリッシュ[六]の如き、亦此に次ぐと謂ふべし。然れども輓近文明に關する論議の盛に起り來れるは、主として歐西當時の世態に激する所ありて作り成せる文明論なりとす、[七]尤も有名なるはルッソオの非開化論[八]にして、文明を以て人間の墮落及迷誤の原由因緣とせり。近時に在りてマックス・ノルダウの論議の如き、亦此亞流に數ふべきもの、エマルソン、[九]ノ非ュフ二氏[一〇]の如きは較、批評の態度に於いて穩健なるもの、キッド[一一]の如きは寧ろ歐西文明を謳歌するに過くるものたり。斯の如きは歐西の教育者、政治家等の往往相胥ゐて陷る所なるが、上に記したるルッソオ、ノ非ュフ以下諸家は則ち這般流俗の謳歌の輕卒を批評せるもの、其社會に於ける識者たるの分に於いては盡せりとすべきも、今者期する所の學術的批判とは頗る選を異にす。凡そ此類は東洋にも亦其匹儔を看出すべし、新井白石、賴山陽の我國に於ける、[一二]大史公、賈誼、蘇老泉以下論策家の支那に於ける、歷史及文明の評論は皆擧げて例すべし。文明の學術的攻究は、近時漸く開け來れるも、固より其根幹の學たる社會

一　Fergusson: Civilization considered as a Science.

二　G. Ratzenhofer: Zweck und Wesen der Politik. Civilisation. Victor Considirant: Distinée sociale, I p. 120 以下參看

三　Crozier-Civilization and Progress.

四　Adams: Law of Civilization and Decay.

五　Funck-Brentano: La civilisation et ses lois: morale sociale.

六　Jurisch: Grundlage der Philosophie der Kultur.

七　Edward Carpenter: Civilization, Its Cause and Cure & other Essays. London. 1897.
Bernard Bosanquet: The Civilization of Christendom. London, 1893.
J. Gaumé (原佛文): Geschichte der häuslichen Gesellschaft bei aller alten u. neuen Völkern od. Einfluss des Christentums auf der Familie. Regensburg. 1863. 3 Bde. 序論(S.229)一篇の文明論なり。

八　Jean Jacques Rousseau: Discours sur les sciences et les arts 1756. Dijon. 大學の懸賞入選の論文。

九　Nordau: Conventional Lies of our Civilization.

一〇　Emerson: Civilization. 論文の一

學の造詣の未だ大に進まざるに伴うて、未だ甚だ觀るべきの結果に至らず、乃ち文明の名稱及概念の混沌たる濫用を裁理して充分明確なるは尚未だ遼なりといふべきものたり。

文明論は宜く社會學就中社會動學講明の結束として存すべき者、今上來の研究の地に據りて、聊か此題目に對する批判を試みむとす。[一四]

第二節　文明の義解

普通に解せらるる所に據れば、文明とは社會狀態の渾一的理想なり。

世間最も屢〻用ゐらるる通語にして而も意義の最も曖昧なる者甚だ多し、社會上の事項に於いては、文明といふ語亦其一なり。

夫れ歐西に在りてシヂリザシオン、クルトゥルの語は如何に曖昧多義に用ゐられしか、[一五]和漢に於いて化、敎化、治化等の語が如何に頗る多義に用ゐられしか、將た明治の時代に至りて又文明開化等の語が極めて曖昧に、又濫雜に用ゐられしかを一考せば、文明の義解の困難、隨うて其急要は思半に過ぐる者あらむとす。[一六]今此困難なる事業の第一段として、斯く屢〻用ゐられつつある語について、其意義の全體には非常の大差あるにも拘らず、其之を用ゐるの動機、之を用ゐるに於ける目的に於いて悉く相一致するものあるを認め、この目的に副ふが如く此語の意義を定めむが爲には、如何なる包含を此語に附すべきかを實理的に決定するあらむとす、是れ此の如くにして文明の義解は先づ最も大體に於ける方針の一定を見るべければなり。

從來和漢の敎學に用ゐたる敎化の語は、其敎學の根本思想より來たる者にして、社會の先覺者が社會統制の中心たるや敎化的首長となり、此職務を全うせむが爲に統制組織の發達を成し、此組織に於い

一一　Novicow: Les gaspillages des sociétés modernes.

一二　Benjamin Kidd: Principles of Western Civilization.

一三　讀史餘論、日本外史二書の如き正に是れ大なる文明論といふべきもの。

一四　本篇述べむとする所は文明史に非ず、文明史は本著第一卷社會學序說第二篇第一章第二節に述べたるが如く、社會學とは別然たる區別あり、隨うて毫も社會學の一部を形成すべき性質のものにあらざるなり。後註コンスシデラン、エンゲルスシの說の如きは乃ち文明史の所有的範圍に屬す、凡そ文明史の事項に關し、極括なる理法を立つること、危險なり。

一五　J. H. Ferguson: Philosophy of Civilization. A sociological Study. London. 1890. 謂へらく、文明とは善の主觀、思念を客觀實際に現するの過程に於けるなり、卽ち社會現在の狀態なり、卽ち社會生活に於ける善惡の改善に外ならず、と Paule Leroy-Beaulieu: L'État moderne et ses Fonctions. Paris, 1890. 謂へらく、文明は單に知識に於いて成立せず、實に道義的習慣に於いて存す、卽ち個人的創意の嗜好、自由的協同生活の嗜好、節用の蓄積的活情、個人的責任を包含す。（同書結論の一節）

一六　（說文）化敎行也。（增韻）以道業誨人謂之敎、躬行于上、風動于下、謂之化、（禮樂記）化民成俗

て民人を敎育し、民人に利用厚生の樂地を與へ、乃ち民人をして其所を得、其生に安んぜしむる所以の事業に名づけて、之を敎化と謂ひ、其盛に行はるるに名づけて敎化の普及といひ、或は亦化育といひ、亦單に化といふ。先覺者卽ち聖人が行ふ所の此職務は、個人に在りては性に率ひ、卽ち天の命に率ひ、宇宙に在りては宇宙の勢運を輔くるに在り、聖人の職務は卽ち亦宇宙が人生に對して、有する所の職務にして、敎化の事は卽ち天地の化育に參する所以なり。敎化の眞義は由來斯の如く判明なる者、而して其用ゐらるる範圍も多く學徒の間に限られしが爲に、意義の濫雜は未だ太甚だしきに至らず、其或は多義なるが如く見ゆる者は、唯知識の不完全なるに坐する弊に過ぎざりし、之を要するに、和漢の所謂化は社會の進運の過程作業のことなりしなり、化は社會の進歩的實現に外ならざりしなり。

東洋に在りて、印度は全然宗敎文明の社會なりしを以て、其文明に對する思想も、若し之有りとするも、亦實に宗敎思想の圈外に出づる能はざりき。宗敎的向上は、社會的に非ずして個人的なり、個人にも、人格的にあらずして超人格的なり、人的にあらずして唯心的なり、寧ろ唯靈的なり、此間に向うて文明の概念を求むる、寧ろ方角違ひの徒勞に過ぎざるなり。

歐西のシヰリザシオン又はクルトゥルの語は殊に第十八世紀の終期の頃より盛に用ゐらるるを致せり。蓋し啓蒙時代の思想、社會的大革命のやがて來るべき運命に瀕せる社會人心の深底に於ける暗流が、時に其不安の聲を洩らすや、向ふ所は實に文明の標的に於いて存せざるを得ざりしなり、爾來每に用ゐられたる這般の語や、概して之を言はば、世態の好ましき方に向ふ事、之を斯く名づけたりと謂ふ可きも、其好ましといふ事に於いて意義の極めて曖昧なるあり、且歐西多數の俗衆は、前前世紀よりも前世紀、前世紀よりも今世紀の歐西の世態を以て好ましと爲し、或は更に漫然と一切の歐西社會の事物を以て歐西以外の社會の事物に對せしめ、甲を文明的と爲し、乙を不文明的と爲し、乃ち所謂文明は歐西社會の流俗の御國自慢に過ぎざるの觀あるに至れり。是れ歐西に於ける文明の一意義なり。學者往往文

一七　Victor Considérant: Destinée sociale. 1890. 文明の一代記を作りて左の如しとす。

○進動の一般

上昇形式
- 第一期　變遷
- 第二期　生誕
- 第三期　幼孩
- 第四期　少壯

充實形式
- 第一期　成熟
- 第二期　高老
- 第三期　極初

降下形式
- 第一期　變遷
- 第二期　頹老
- 第三期　死亡

明階級の說あり、コンシデランの文明一代記、[七]エンゲルスのマルクス及モルガンを祖述せる史前的及史的文明階段の說の如き、[八]更に達觀せるものはフィイアカントの自然及文明民族、未開半開完開過開の說[九]の如きは、其學術的價値に於いて固より這般流俗の見と異なれども、大體に於いては、地理的には歐西を、歷史的には新しく近き時代を、比較的に樂觀し、且好ましき方に進むを以て文明的傾向と目するに於いて這般の俗見と契合するものたり。[一〇]

中には又ルッソオの如く、新なる世紀を以て益、好ましからぬ境地に陷り行くとするもあり。多くの識者は中間位に立ちて、世態は時の進むに隨ひて變遷し、此變遷は概して言へば好ましき方なるも、頗る亦好ましからぬ者をも伴ふ、而して是等は人の努力を以て省去するを要する者とす。是れ第二及第三の意義を成す。

斯の如く歐西の所謂クルトゥルは、或は世運の勢に名づけ、或は之に對する理想に名づけ、又或は全くクルトゥルの成立存在を拒否せむとする者ありて、一樣ならざれども、世態の好ましき境地に名づけて斯

一八　Friedrich Engels: Die Ursprung der Fam., des Priv., u. des St., p. 7.

史前開化
(一)野蠻
(イ)下段
(ロ)中段
(ハ)上段
(二)未開
(イ)下段
(ロ)中段
(ハ)上段
史後開化 ― 文明

此移り際には第一社會的大分業。(イ)畜に他の未開段よりも多量の生産を遂ぐるのみならず又多種の生産を成す。(ロ)第二大分業。手工業の耕より分離。斯くして文明の闘に至る。(ハ)商業の成立

一〇　尙其條理ある敍述は A. Vierkandt: Naturvölker u. Kulturvölker を參考すべし。

其他尙文明階段の說には左の諸家あり。A. Bordier: La vie de société. 1887. 動物の馴化と人の文化とは相應する事實なりとす、文明の階段を一、營養的、二、感覺的、三、體力的、四、智能的、五、科學的の五段とせり。Cp. 49) Otto Henne am Rhyn 亦其大著に於いて文明の階段を論じ、主として地方觀及時代觀より細論を試みたり。

く稱謂するに至りては、其揆を一にすと謂ふ可し。

凡そ文明の語の名義に濫用せらるる、未だ現代に於けるが如く太甚しきはあらず。文明又は開化といふ語の現代に於ける使用は、歐西のシヰリザシオン又はクルトゥルを譯せる者なれども、其意義亦既に少異を生ぜり。今之を幾分變遷の次第に隨うて列擧すれば左の如し。

第一、眞に歐西の世態の如くに自個の世態を變化するが是れ文明開化なりとする者。是れ文明開化の福音の西來に際し、て尤も先づ我俗衆を支配せし理想なりき。抑、歐西に在りて、文明の爲に前世紀今世紀等の世態を云々するは、固より歐西自個の世態についていふ者にして、自個の社會の趨勢についての判斷は、自個の社會の過去及現在を資料とせむとする者なるも、我現代の俗衆が文明開化を喋々し、歐西の多數民衆と同調なりと思惟するは、自個の世態に基づくことを遺忘して他者の世態に本づかむとするものなり。歐西の民衆は、自個の世態其儘が是れ文明開化なりとするに反して、我國の俗衆は自個の世態を棄てゝ歐西の世態を踏籍し模倣するが是れ文明開化なり

とするなり。

第二、歐西の識者が歐西の世態について看出す所の缺點を改良し進歩して以て歐西の世態に模倣踏籍せむとする文明開化の見解是れ恰も歐西に於ける識者の見解に應ずるものなり。

第三、我自國に存する眞美なる社會事象の保存を以て文明開化の眞諦なりとする者。此類の見解は、先づ歐西其他他國の社會事象を模倣する所の所謂文明開化を以て、社會に寸益なく人類に稗補なきものと斷し、我國に現に存する者を保持し、曾て存せし者を回復するにあらざれば社會の料理は不可能なりと爲す、卽ち期せずしてルッソオの非開化論と同轍に陷れる者なり

第四、右第三の見解の立脚地は、文明開化を以て自個の脚上に立つ者とするものにして、前二者に比して大なる進歩なるも、而も人生社會の進歩を認むるに疎きはその缺點なり。社會の料理は自個の上に立ち、自個に由りて次第に進歩を企圖せざる可からず、其進歩の細目及手段の細目は暫く擧げざるも、斯の如くにして到達せる進歩の社會狀態の總束、之を名づけて文明開化とこそは謂ふ可けれとする是れ卽ち第四の見解にして、歐西識者の見解と形を異にして、質を同じうする者、且其境地の一層批評的なるだけ、一層立論の精緻を加へたる者なり。

右四樣の見解について、第一は日本が始めて歐西文明に觸接せるに際して取敢ず起れる社會理想にして、尤も素朴粗雜なるもの、其少しく精醇となれるは第二なり。此兩者は、いづれも模倣卽ち思想發達の第一期たる獨斷時代を表すものたり。[二] 第三は更にこれに次いで起り、始めて我社會の自個覺醒の域に進めるを表する所以のもの、思想發達の第二期たる懷疑時代を表す。[三] 而して思想發達の第三期に應ずるは卽ち上の第四の見解なり、所謂批判時代、實理思想是なり、自と他、主と客、兩面の觀に詳にして、世界人類の渾一的發達に協契せむとするものなりとす。[四] 而して歐西文明に觸接する以前の思想は守舊主義にして、實に獨斷の第二種たる自依的獨斷に應ずるもの、こは固より文明の見解の裡に入らず。[三四]

二　社會上の歐化主義、政治上の世界主義、自由主義、改進主義、國家主義、平民主義、歐化主義はこれに屬す。歐化主義の物質的なるは三円流の「實利」主義（宜く功利主義といふべき）にして、そのの精神的なるものは基督教主義なり。

三　社會上には國粹主義、懷疑主義、權利主義、政治上には國家主義、懷疑主義、權利主義、乙は現時に屬するもの、甲は客觀主義、これに分たるものにして、頗る其思想の煩雜せること、亘りて大に此類の思想と社會上の政府主義、因襲主義、乃ち往古の形式的觀念に詳にして、世界人類の渾一的發達に協契せむとするものなりとす。而して歐西文明に觸接する以前の思想は守舊主義に屬するものにして、實に獨斷の第二種たる自依的獨斷に應ずるもの、こは固より國家主義の如き哲學者が近時の時勢に非ざるなり。

上來段を累ねて述べたる所を約すれば、文明といふ名目について
は、和漢に一解、歐西に三解、現代に四解、大體の說明猶八解あり、而も其
間に共通する主義は何れも社會の大體に於いて好ましき狀態に名
づくるに在りて存す、乃ち文明について最も初等なる義解は既に玆
に成立す、從來立せる術語を以て之を表せば、

文明とは社會狀態の渾一的理想なり。[二五]

といふこと是なり、となる、何となれば社會現象個個の理想は以て文
明と爲すに足らず、文明は凡そ社會狀態の全般に係る事項なればな
り。

今更に文明の意義を明確にせむが爲、緻密なる分析の
歩武を進めて以て考究する所あらむとす。

第一、文明は理想なり。見在、理想、及實現は人生進動の
三段節にして、糾繩の如く、螺線の如く、三者の連繫轉回以
て人生の進動を成す。文明は見在に卽いて命名せらるる

二三　社會上には實理的社會改良主義これなるが、我現代に在りてはその聲尚甚だ微なるは和生硬なる洋折衷、採長補短の名に於いて闖ゆ。政治上には自主的外交により人道的外交へ、例へば著者往年の開戰論（拙著外政時言、經世時言參照）に進めるの徑路に見るべく、彼の侵略主義ジンゴイズムの第二期的なるに對照の大差あるに注意すべし、社會政策主義は內治上の第三期主義なりとす。

二四　神風、運の國體思想、佐田介石流の經濟思想、丸山作樂の專制的政治思想の如き其標本なり。

二五　(a) Civilisation is the unique ideal of social condition.

ものに非ず、文明は一種の標的なり、未た見在に於いて具
體的存立を見ざる所の標的として、先づ人の想念に於い
て成立するものなり。人の想念に空想あり、理想あり、就中
宇宙卽人生の理法に協契する想念を理想とす、空想は到
底實現を期す可からず。文明は固より實現せらるべき想
念なり、文明は理想なり。

第二、文明は理想及其實現なり。文明最初の成立は固
より理想としての成立なるが、文明の發現は、具體的、事實
的に存せざるべからず、既に理想として成立の第一歩を
了し、而して單純なる主觀的存立に了らむは、文明の容さ
ざる所なり、文明は必ず理想の實現に到らざる可からず。
但し事實の上に於いて、理想と其實現との界域は、文明の

包含として必ずしも判明ならず、是れ之を理想の實現と謂はずして乃ち理想及其實現と稱する所以なり。

第三、文明は自個實現なり。理想には依他的なるあり、自依的なるあり、隨うて實現にも亦依他實現あり、自依實現あり、自個に由り、自個に於いて存する所の理想を、自依的に實現するは其上乘なるものにして、之を自個實現と謂ふ。個人道德に在りても、依他的より漸く自依的に進み、道德の最も進めるものは、自個實現を以て眞諦とす。今文明は亦實に自個實現なり、文明は超絶的なる他力の來りて作用するを須ちて實現するにあらず、文明の理想は文明の主體の外物に由り外物に於いて存立するにあらず、文明は其主體自個に由り自個に於いて存する所の理想を自依的に實現せるものなり、文明は自個實現なり。

第四、文明は社會の自個實現なり。文明は人生分內の事なること勿論なるも、文明の主體は個人なりや將た社會なりや、文明は個人の自個實現に非ずして實に社會の自個實現なり。個人が道德を以て自個實現を成し、人の人たる所以の者卽ち人格を完成し發揮するが如く、社會は文明を以て自個實現を成し、社會の社會たる所以の者卽ち社會性を完成し發揮す。社會に於ける個人は亦各社會の一員として社會文明の司配を受け、社會成分として社會の自個實現に參與す。此關係に於いては個人も亦文明と密接の關係を有すれども、文明は個人の自個實現にはあらず、文明は社會に由り社會に於いて存する所の理想

を社會自ら實現するものに外ならずして、卽ち社會の自個實現なり。

第五、文明は社會の體制的渾一的自個實現なり。社會事象、個個の理想や個個の實現や、以て文明と爲すに足らず、文明は凡そ社會狀態の全般に係る事なればなり。文明は社會の渾一的實現なり、渾一的理想なり。渾一的實現は必ず社會體制に由る實現ならざるべからず、部分的なる、節度なく調和なき實現は渾一的實現たるを得ず、文明は必ず體制的實現なるを要す、而して社會體制の發達卽ち制度の發達と社會文明の發達との密なる相關亦夙に玆に發露す、文明は社會の體制的渾一的自個實現なり。但し個個の社會事象について亦文明的又は單に文明といふことあるは、右の文明の概念より來るものにして、こは文明に協ひ應ずるの屬性を表示する形容詞なり。[二六]

以上五段の分析を以て、文明の概念、之を普通に解せらるる所に比して、詳密を加へたりとすべし、乃ち更に文明を義解せむか。

文明は社會の體制的渾一的自個實現なり。

文明の概念上の如しと雖も、其說甚だ抽象的形式に過ぐ、今文明の考察に上るに際して、更に具體的なる、更に實質的なる解釋を要する、能くすべくんば復た若干の考察を文明の屬性に費さざる可からず。

第三節　文明の屬性

文明は社會の自個實現なり、乃ち文明の屬性を繹ぬる、亦見在、理想及實現の三綱に就いて考察するを要すべし。

二六　例へば文明的政策、文明の行爲といふが如し。

第一、文明の見在如何。社會といへば文明を謂はざるを得ず、文明をいへば見在を問はざるを得ず、文明の見在を總束すれば左の如き者と斷せざる可からず。[二七]

甲、文明の見在は、[ロ]に見在の人心の希望に對して不滿足なり。

乙、見在の文明は、其歐西に觀るも、其東洋に察するも、一として以て模範的文明と爲すに足るものなし。既に之を模型として上進增大するに足らず、更に其形式の根本より一大改革を須つ者の如し。

丙、見在の文明は、東洋にも、歐西にも、共に其歷史の獲得にして、將來の文明に大なる貢獻を爲すべき造詣を有す、是等は斷じて沒却を許さざるのみならず、應に將來の文明の一大要素として保存し發達せらる可き者なり。

丁、見在文明の貢獻を以てせば、頗る善美なる將來の文明に達す可きも、未だ以て充分なりとするを得ず、多くの人的進化の事功に於けるが如く、更に人間の性能に賴り實理に準じて更に構成する所あるを要す。

第二、文明の理想如何。文明の理想の詮議は、前篇[二八]の成せる所既に其殊相を得たり、今其全相に就いて特に觀察を要するは、文明の理想は何處に存するか、文明の理想は如何にして發生するかの二點に在り。

甲、文明の理想の所在如何。三樣の見地あり。

伊、在外觀。謂へらく、文明の理想は外社會に於いて之を求む可しと。此見地に復た二樣あり、現今說卽ち現在の

二七　其構詳評は之を今は第三章に結果詳のみすは之を、理を揭げ般想判斷に關見在のの文のの一理の得の吟味者と更にて下すに本係文のの文を實證のす味者なにて下すに本係文のの文を實證のす味者なにて下すに本係文のの文を實證のす味者なに

外社會に存すとする者、及過去說卽ち史上の外社會に存すとする者、是なり。前者は外國模倣となり、後者は尙古[二九]となる、其いづれも不完全なる理想たるは明なり。

呂、在內觀。謂へらく、外に向うて文明の理想を求むるは過てり、文明の理想は自個の社會が向うて進むべき理想なれば、必ず之を自個に求めざる可からずと。此は理想と實現とを混同する者、所謂自個にして、若し必ずしも理想的自個を意味して、見在的自個を意味せざるか、こは寧ろ內外の辨を超絕するものたり。

波、普遍觀。謂へらく、文明の理想の所在に內外の辨を費すは抑陋なり、文明は個人の事に非ず、又一個社會の事に非ず、乃ち宇宙の間に於ける普通の事なり、文明究竟の理想は宇宙に存すと謂はざるを得ずと。宇宙に存する文明の理想を捕へ來りて之を實現に引渡すは、卽ち發生の問題を成す。

乙、文明の理想の發生如何。根本理想の三類に應じて三類の見地あり。

伊、超絕觀。文明の理想は超絕的實在の天啓默示に由りて發生すとする者、是れ依他的宗敎觀に於ける者にして、人間思想の猶幼稚なるや、這般を以て僅に社會の進み行くべき標準を求めむとすること屢なりき。夫の宗敎文明の社會乃ち是なり。斯かる理想を抱持せりとて、固より社會の自個實現を促すに足ることなし。

呂、個人觀。文明の理想は個人に由りて個人に於いて

二九 Classicism.

發生すとする者、是れ自依主義より來る見地にして、既に超絶的實在と社會との關係を拒否するに進めども、文明の理想を以て單に個人に於いて發生すとするが故に、社會的基礎は文明に於いて見るべきに至るを得ず、社會の實現たるべき文明の理想が遂に個人の事象と化し了するの弊を致す。

波、社會觀。　文明の理想は社會に由りて社會に於いて發生すとする者、是れ大觀主義より來り、完全なる社會的見地に到着せる者とす。唯夫れ絶對的平等は、社會の性質上、到底實地に存するを得ず、社會の成分としての衆個人が其各個多少の差等あるは自然にして又必然なり、乃ち社會に由ると謂ふも必ず個人を介すべく、就中直接に斯かる理想を闡明するの職能に當る者も、亦社會全體の衆個人なるを得ずして、必ずや多少限有る個人ならざるを得ず、而も是等の個人は、個人說に於けるが如く、個人としての個人にあらずして社會に屬する個人なり、社會の心意的機能の中樞としての個人なり、社會的自覺の最も深厚なる焦點なり、宇宙の理法の最も昭明なる主觀的卽ち知識的[三〇]顯現を成せる所の者なり。斯人や先づ社會の執りて進む可き方針理想を覺得し、一呼して社會民衆を麾き、社會靡然として之に應ず、斯人や卽ち豫言者と呼ばれ、英雄と呼ばる、學術上之を名づけて儁英[三一]といふ。

第三、文明の實現如何。　理想の問題は次に來らざるべからず、而も文明の概念として上、既に詳述せる自個實現

三〇　實在的客觀的に對す

三一　儁英は歐米一般の術語としてHeroと稱せらる。

は、之を明にして餘あり。外社會に賴るの實現は社會の極めて幼稚なる時に於いて存すべく、專ら內社會卽ち自個に賴るの實現は社會の頗る進めるに於いて達す可し。社會の觀念、外延的に大に擴がり、全世界を以て一社會を成すに至るも、文明理想の實現は到底自個實現の方式を脫す可きに非ず。

文明の全相より文明の要義を詮索し、文明の見在、理想及實現の三點の考察よりして、文明について擧げ得べき性質を求むるに約して左の如し。

一、文明は人生社會の過去現在の造詣に察せる成績ならざる可からず。

二、文明は實理の示命に隨はざる可からず。

三、文明は儁英の指導に賴らざる可からず。

四、文明は宇宙の化育に參贊せざる可からず。

乃ち之を攝取して文明の概念に加へ、更に文明の義解を作爲すること左の如し。

文明とは、人生社會の過去現在の造詣に察し、實理の示命に隨ひ、儁英の指導に賴り、宇宙の化育に參贊する、社會の體制的渾一的自個實現の總束の謂なり。

理想としての文明の部分的考察は社會的理想の各節條下に成されたり、文明の進步とは凡そ這般の渾一的進步に名づけて謂ふ者に外ならず。此渾一的進步の爲には二個の要件あり、第一は各理想の支離滅裂より調和協合に向うて進むこと、第二は各理想がそれぞれ內容に於いて進步すること、是なり。政治上の主義と敎育上の主義とが仔細なる吟味の結果矛盾衝突するを見るが如きは、第一要件の不充

三、近時我國に見る家の制度に對する規範が法律と敎育とに於いて矛盾杆格するが如きは、その著明なる一例を供す。

足の例にして、專制主義より自由主義に進み、自由主義より立憲主義に進むが如きは、第二要件の充足の例なり。此二項の要件を伴ふ所の理想の渾一的進歩は、實理的文明の外には一も存することなし、乃ち文明究竟の進歩は茲に明了すと言ふ可きなり。

第四節　文明の要素及規定

文明を分析記述するは、要素、規定、機關、及力の四項に於いてするを要す。

文明の要素及規定は、大體社會の要素及規定に准ず。蓋し文明は社會の自個實現に外ならずして、其成立や社會の要素以外に於いてするを得ず、規定は要素の屬性の差等を以て主者とするが故に、文明の規定は社會の規定を出づること大ならざるを致す。

本書第三篇第一章社會學理論の目名を以て、心意の作用を說明したるに、心意は呼び名なり。心意とは人の意志なり。心意は人の意志なり。心意とは人の意志なり。心意とは人の意志なり。心意とは

民族の體格、就中體形の規定事項の中、身長及身幅身厚、下肢と軀幹との長さの比、身體の其他各部の比例釣合、頭髏の形狀、顏面角、外貌の美醜、以上六項を實規定とし、鼻の形狀、唇の形狀、眼睛の色、膚色、毛髮の色、毛髮の横斷面の形狀卽ち縮れ方、脛骨の横截面の形狀、以上七項を虛規定とす。虛規定は單に人種の差等たるに止まり、其優劣には何の關係を有せず、特に文明の性質を規定するに力あるは實規定[三四]なり。

Real and Imaginary conditions.

甲、身長の大は原始時代に在りては頗る文明の規定として有利有力なりしも、社會の進むに隨ひ、其效果次第に減じ、其效果往往反對に趨るの勢あり。

身長及此に應じて身幅身厚の大なるは、第一に、運動量の大なるに於いて利あるも、此利は直接に身體を以て運動量を作爲する場合に著しく、器具機械の利用進むに隨ひ此利減ず、家内の瑣事、格鬪、競技運動の如きに利あるのみ。身長の大は第二に、戰鬪にも利小にして不利大なり、利の一は携帶武器彈藥の量、大を加ふること、利の二は行進の速さが身長の平方根に正比して增大すること、不利の一は射擊の標的となり又地物の利用に於ける損失が身長の平方に正比すること、不利の二は散兵濠の深さの增大は掘鑿力の增大と相殺するも此に要する時間が身長の平方根に正比して增大すること、不利の三は輜重の大を致すは運搬力の增大と相殺するも脆弱なる道路橋梁の利用力の減殺すること、是なり。身長の大は第三に、人間生活に要する地積が身長の平方に正比するに於いて不利あり、卽ち他の條件均一なるときは身長の大は版圖の狹隘を促す。

乙、軀幹と下肢との比は小なるに利あり。

丙、身體各部の比例釣合は多少の意義あり。

丁、頭體の形狀の價値は全く解剖學的なり。

戊、顏面角は大なるに利あり。

軀幹の長きは、營養機關が比較的多大の質量を占むるの徵にして、不利なり。下肢の長きは移動を輕捷にし、意志の活動を敏速にするの利あり、身體各部の釣合は往往虛規定なれども、上肢の長きは活動の大を表示し、殊に手工活動に長じ、指の長きは就中技藝活動の發達を表示す。一般に開明民族の頭體は大にして且整形、野蠻民族のは小にして且歪形なり。縱體橫體[三五]の區別あるも、比較解剖學の造詣に察すれば大小縱橫は必ずしも悲觀樂觀[三六]に値せず。顏面角は營養の門たる口腔と智能の府たる大腦との顏面に於ける發達の比較の成績たり、是れ自保と活動との比例を示す。

己、外貌の美醜は民族の進退勝敗に與りて力あり。

體格上の美觀の標準は、大體に於いて人類社會に粗一定の公準あり[三七]、美觀は兩性の愛情を促進するに力あり、同民族の間に在りては、以

三五　Dolicho and Braeky cephalus.

三六　Vacher de Lapouge. Les Selections sociales. 及 L'Arien: Son Rôle social. 氏は佛人及テン民族の橫體を觀して、其到底縱體なるアングロサクソン、ゲルマンに敵にあらざるべき人の悲觀せざるべきを上實理上充分の根據なき自個悲觀は、それこそ民族の運命上悲觀すべき所なれ。

三七　黑人の膚の尊尙、一部に於ける那婦人の纏足、日本婦人の八字、朝鮮男子の扁平頭、歐洲婦人の腰の如き、爲蜂の例外なきにあらざるも、大體は共通の標準あるなり。

三八　Novicow: L'Avenir de la Race blanche 亦此說あり。

三九　天然甚だ美なるときは相伴ふも、然らざるときは人體美に偏向するを免れず。

て民族の上進を致すに與り、異民族との混婚に於いて、亦以て優勝者となる[三八]、外貌の美醜は亦民族の美的感念に影響して、天然の愛好と或は相反し、或は相伴うて、美術の實質[三九]に立ち入り、斯くして文明の形象に影響す。

民族の體格に於ける體質卽ち强健力の差異は、體形の異同に比し、遙に後天的、隨うて個人的なるも、民族に亦多少强健劣弱を謂ひ得ざるに非ず、其差等が文明の實現に影響するの大なるは固よりなり。

第二、民族の性格は文明を規定す。

性格は、之を體格に比して、其規定的效果の大にして且直接なるに拘らず、個人的特色に富み、後天的移動性大なるを以て、特に人種の性格を特定するに難し。凡そ本始的性格の差異は、同一の環象に遭遇するも之を別種の經驗

と做すが故に、文明の主觀的規定として重要なり。殊に冒險性は、自他文明の觸接授受を敏速にし、[四〇]以て文明の發展及變態の機會を大にし、怜悧性は文明の攝受及順應に便し、[四一]勤勉性は文明の自發的開展に宜しく、[四二]殺伐性は文明攝受の機會を減殺す。[四三]後出的なる民族心理的事項も、其爾後の文明發展の規定たるべきは明なり。[四四]

第三、國語は二項に於いて文明を規定す。

民族の言語は約して之を國語と呼ぶ、國語は、凡そ言語に普通なる性質に於いて、及特定民族に固有なる性質に於いて、文明を規定するの效果甚だ大なり。

言語に普通なる性質は、社會民族の心的生活の公寶庫たるに在りて、同しく心的生活の成績表彰たる文明と近

四〇 フイニシア人の如き其例なり。

四一 日本人は其例なり。

四二 アングロサクソン人獨逸人の如き其例なり。

四三 パプア人には外邦人恐れて近づかず、塞灣生蠻が世界交通に於けるが如き其例なり。

四四 印度、支那、朝鮮、及日本に於けり發展の運命に大差ありしことを以て觀るべし。

密なる關係を有し、而して國語の特殊より來る文明の規定直に此より生ず。國語の特殊は文明の有力なる界劃なり。國語を同じうする兩社會民衆は其文明を共通にする傾向甚だ強し、偶、異種の文明を有せるか、這兩種の文明は、共通言語の媒介に由りて相互に滲透作用を成し、久しからずして其渾鑄鎔冶を成すに向ふ、但しこは罕觀の例なり。國語を異にする社會に向うて文明の傳播は較困難を免れず。[四五]古代に在りては、國語の界劃は大抵特殊文明の界劃なりき。[四六]

國語の特質の差は文明の興隆に對して各長短得失を有す。語尾の變化に富めるは精密なる思想を表すに適し、就中屬性及動作、并に二個以上の事物の相關に於ける變

四五 先づ國語の相互了會なる成さるは以上、文明の傳播は底徽妙なる點に到達し得ずノルマン征服以降佛蘭西の文明の英吉利に入りしは、先づ變態のノルマン語が英の官話となれる後なりき。

四六 埃及、バビロニア、アッシリヤ、波斯、印度等の古代文明に觀るべし。

化を表すに適す。[四七]品詞の配置の自由なるは詞藻に適し、[四八]其嚴肅なるは精密なる思想に適す。[四九]性、數、法等の精密なるは精密なる思想と精透なる外界の寫象とに適す。語彙の大小及其特徴は、各種民族特有の思想感情等の存立及發達に應ず。[五〇]記言に於ける字母及記法の差異は亦文明の進捗に對して各種の長短得失を有す、但し記言は較發達せる社會ならでは發生せざる事項なるを以て、其が文明の規定たるは多く本始的ならず。凡そ國語に於ける是等の特色は亦其擴衍の便否に於いて特色を有す。

國語が文明の規定たる此性質に應じて、國語の整理及國語の擴衍は行はる、而して國語の擴衍を以て文明擴衍の先驅とすること尤も數、なり。[五一]

四七　今の獨、英語、古の羅甸、希臘語の如し。

四八　羅甸語其例なり。

四九　獨逸語その例なり。

五〇　漢語が山川草木等の具體的形容に富める獨逸語が抽象的哲學、思想の語に富み、漢語が實踐的哲學、思想に富むの類これなり。

五一　國語の整理及擴衍は教學、政學、社會學、實論に於ける國語政策の詳に究明する所なり。

第四、民族の純雜は四項に於いて文明を規定す。

民族が社會文明の規定たるに於ける實質的方面は上の三項に存す、其形式的方面は卽ち民族の單複純雜が如何に文明を規定するかの詮議に存す。此規定は概要四種の理法に攝せらる。

甲、民族の單一純粹なるは社會的統一及統治に利便を供す。單一純粹なる民族より成る社會には人種的感情濃厚となり易く、賴りて以て社會の結合統一を便にす。この感情は、或は直接に發動し、或は宗教思想、神話の信仰、傳說の尊敬等の形に於いて間接に作用す。愛國心は通例右の直接發動に於ける人種的感情を主要素とすること多し。[五二]民族の複雜不純なる社會に在りては、此點よりする社

五二　日本社會民族の成形以後に於けるや、久しく民族の純一は保持せられ、而して人種的感情の直接發作を見ること大なり、支那民族、就中漢人、頗る近きも所謂唯一般に對する人種的感情の直接發作なる民族に發作して愛國心の如くして其作用を見ること少きに似たり。

會的統一は較〻困難なり。[五三]民族の純一なる社會は較〻統治に便なり、時として社會の頗る發達を遂げたる後までも、族制若くは其面影を存し、統治の形式亦幾分之を含みて基礎を此に寘くことあり。[五四]民族の複雜なる社會は、人意制度の完備せざるに於いては、動もすれば統治上の缺陷より崩解の因を成す。[五五]民族の純一を利とするは以上の點に限り、文明の規定として好果を將來するは寧ろ民族の複雜に存す。

乙、民族の複雜なるは特色ある社會文明發生の機を藏す。民族の複雜なるや、相異なる種種の民族心性、民族行事の駢存駢進するあり、その間自然淘汰及融合化成の行はるる機會多く、之を純一なる民族文明を有する社會に比すれば、自發的に文明の發達を遂ぐるの機に富む。但し階級制度の餘りに峻嚴にして、優劣、上下、强弱の分の確立する社會に在りては、此效果を見ること難し。[五七]

丙、民族の複雜なるは社會的分業より一種の文明發達を效果す。但し斯くて發生し發達する所の文明の健全なりや否やは別論に屬す。此效果を將來するには階級制度に於いてするを妨げず。[五八]經濟運營一階級に專屬して、他の階級、經濟の勞苦より解放せらるるとき、貴族的、實は遊民的、政治宗教哲學藝術は、往往實を離れ華に趁り、健全の性質を缺くと雖も、當時の社會の渾一的發達に對比して、夙成早熟の結果を見る、これ亦民族の複雜より來る斯かる特殊の社會組織の一效果なりとす。

五三　現時に至るまでの露西亞如き、歸化せざる異種族の錯雜なる特色の米國の一例にしては、正米國に於ける適時近亞細亞人排斥熱は幾分の根據なり。此間に有す

五四　日本の立憲政體の如き幾分かスパルタの社會の組織に由來して成立せるもの

五五　支那の政治的不安の累代の變改はまこと北南の一因なり、朝鮮以來の異民族の入こと少なし。滿洲は軋轢の目擊する現に吾人の所の如し

五六　希臘のドリアン、エオリアン、イオニアン諸民族文明より希臘文明の化成せるエトラスク諸民族文明の化成せるが如し。羅馬のラテン諸民族文明より羅馬文明の化成せるが如し。其例證を供す。

五七　印度に於ける婆羅門、刹帝利、吠舍、首陀の四級の如き其例なり。

五八　印度の古代に在りては婆羅門教の開けたる哲學思想は、婆羅門が他の一切の哲學を盛に思想せしに反し、婆羅門教は專ら宗教に及び、哲學は專ら宗教に及ぶ。彼の斯くの如き專業の利益は、專ら政治、專ら兵事、專ら農商工に關する巴役勞利勞働阿役唯に專ら宗教哲學のみに關するのみならず、哲學家の健全なる思想は、宗教哲學の牛耳を執り、政治過程の組織、藝術的思想の如き、實に結果の充分なる社會に得べからざるもの、實に結果の充分なる社會に得べからざるもの、實に結果の充分なる社會に得べからざるもの、實に結果の充分なる社會に得べからざるもの、實に結果の充分なる社會に得べからざるもの、實に結果の充分なる社會に得べからざるもの、實に結果の充分なる社會に得べからざるもの、實に結果の充分なる社會に得べからざるもの、實に結果の充分なる社會に得べからざるもの、實に結果の充分なる社會に得べからざるもの、實に結果の充分なる社會に得べからざるもの、實に結果の充分なる社會に得べからざるもの、實に結果の充分なる社會に得べ

の發達も、亦ヘロットが農耕役に服せしの賜ならずとせず我平安朝に於ける文學の隆昌、亦猶斯の如きなり。

右の二項は複雜なる衆民族より組成する社會の文明に於ける直接の規定方式なるが、更に間接の規定方式を擧げざるべからず。蓋し複雜なる衆民族は、何時までも其ままに持續するに堪へず、其同一社會を組織するや、自然に起るべき婚淆に緣りて漸く混血を成し、玆に複雜なる由緒を有する一民族を化成す。

丁、衆民族より化成せる民族は強き生氣ある社會文明を生成するに長ず。　凡そ複雜なる由緒を有する民族は、淘汰と遺傳とに據りて、概して心身兩面に於いて強健堅實なる發達を遂げ、若くは發達的傾向を具ふ、乃ち異族の混血は、尤も數、強き生氣ある文明を化成す。

日本民族の由來成立に顧るに、正にその一實例を得べし、而して其反對の事證はまた日本民族の中に於ける平安人に於いて見るべし。東征北伐せる武門武士に比して、平安の宮廷以外數里を出でざる平安人士の衰弱は固より其所にして、所謂王權の下移、亦一因を此に看取せざるべからず。支那の中華人が夷狄に惱まさるるは、亦大規模に其事例の一たらずとせず。當年の希臘人、次いで羅馬人は、複雜なる由緒を有する民族の例なり。帝政以後、首都及附近に於ける羅馬人は、亦我平安人の如く、紀元後一二世紀の間、夙に政治、文學、哲學、宗教に於ける有力人士は寧ろ當年の被征服民族より出で、羅馬人士は往往其制馭提撕を受くるの奇觀を呈せり。[五九] 英人が其優勝を稱せらるるや、アングロサクソンを以て呼ばるるは實に尤も看易き實例なるが、實は右二民族の外、古くはブリトン、ノルマン、デエンの血を混じ、後にはスコッツ、ピックッの血を混ぜるもの、その活力の內に旺盛なるものあり、亦怪ひに足らず。現時に在りて、我日本輓近の歷史を除くの外、社會文明進歩の奇蹟と稱せらるる北米合衆國人は亦實に所謂複雜なる由緒を有する一民族の文明的優勝の一の明白なる實例を目前に供するも

五九　George B. Adams: Civilization during the Middle Ages. p. 23—24.

の之に對して今日尙多少の遜色を免れざるは、カナヂアン・フランセイの截然特存する英領加拿陀の社會なりとす。若し彼にして全然混和するに至らば、加拿陀の發達、恐らくは今日の比に非ざるべし。

以上四個の理法の總果次の如し。人種の文明を規定するや、複雜なる民族より化成せる民族に利最も大なり。

第五、人口は四項に於いて文明を規定す。[六〇]

甲、人口の多少は文明の規模の大小を規定す。文明の性質に對する人口の規定は極めて間接なれども、文明の分量に對する人口の規定は直接なり、文明の分量とは、諸種の社會制度社會事項に表るる文明の規模の大小なり。凡そ人口の大なる社會に於ける文明[六一]の成績は毎に其規模の大なるを得。宗教的信條の如き冥想的主觀的事項の造詣は必ずしも社會民族の大小に關せざるも、智的活動に屬する科學及其應用、經濟及軍事の如きは多く社會民族の大規模なる存立に於いて始めて發達の著きを見る。[六二]

乙、人口率の高低は文明の內包的外展的及繼續的効程を大小にす。人口率の高きは卽ち民族の發展の速なるなり。此發展に內稠及外展の二面あり。民族の內稠は社會的協力及交通を促進して協同生活を濃厚にし、以て文明の內包的發達を促す、田舍よりも都會に、人口の散漫なる都會よりも民屋の稠密なる都會に在りて、民衆の生活一層活潑となり文明の進展の著きは毎に見る所。民族の外展は自然移動に因し、往住を方法として行はる、人口增殖の著大なるに於いて必要を來し、植民政策となりて實現

六〇　人種の體格、殊に性格、言語の如き缺、後天的事項は社會文明に亦た能規の所たり、人口の事は右の如き方面に止まるなり。

六一　希臘文明は性質の善美なるに於いて後世の模範となれど、其の規模の後に及ぶべきに至りて寧ろ雅典の國に見たりき。羅馬は歷山東征の帝國の屬なりしが、世界規模のキカンドリアイレクサンドリアの學府たりしのみ。文明の有せざりし文化の規模は、其の雄大なるに反して羅馬の勝れたるのみ。

六二　哲學も、幾分の規模を具へたるアリストテレスの哲學は歷山東征に近き時代に見られたり。

せらる。其文明に及ぼす效果は、第一に文明の宣布を成し、[六三]第二に文明の交和を促し、第三に文明の自由發達を遂ぐ。一國文明は、發達すべき性質原因を內に藏するも、其本國の社會に在るや、舊慣傳說等の司配の爲に、然るべき發達を成さざること多し、然るに其植民地に於けるや、斯かる羈絆を脫却して長足の進步を遂ぐること罕ならず。[六四]人口の內稠外展、其極に達するや、人口の過剩は往往國際戰爭の因となる。人口率の減耗は卽ち人口減衰[六五]の大現象なり。

人口減衰、詳にいへば自然人口減衰、卽ち自然移動率の低下による人口減衰は、米國[六六]、佛國[六七]、アングロサクソンの衆社會[六八]、及所謂文明諸國の大都會[六九]に在りて近時益〻顯著を加へつつある社會的病弊なり。人口を制限し、若くは人口減衰を肯認する論旨を新マルサス主義[七〇]といふ、英國は曩にマルサスを出だし、今や乃ち其悔むべき病弊に苦みつゝあり。是故に文明列國の識者は近時漸く此問題に苦心し、[七一]各國は亦往往公設機關を設けて、此の社會的病弊の調査研究及救濟を策しつゝあり、而も事や至難にして成功太だ期し難し。[七二]

人口減衰は文明の能規たるも、亦其所規として關係の密接なるものあり。凡そ人口減衰は大概四種の原因の夾雜せる結果たり。第一は生理的原因にして、各種避妊法の實行及其種類の進展、飲酒の增進、惡疾の增進、惡習殊に性慾關係に於ける惡習の盛行、夜深かしの惡俗の增進是なり。第二は經濟的原因にして奢侈の增進、經濟的欲望の增進、過儉、工業の勞働者殊に女工に及ぼす影響是なり。奢侈の增進は所謂文明の進展に於いて殆ど必然に伴ふ所にして、多く人口減衰の原因となり易き生理上の害毒を伴ふ。經濟的欲望の增進あるや、物欲に煩悶する精神狀態は亦人口減衰を惹き起す。過儉は營養不良を惹く、凡そ奢侈と過儉とは表面相反するに似て實は殆ど必ず相伴ふ。第三は心理的原因にして、文明生活に於ける心理的刺戟の大と頻數との增進、政治的革命又は事變の送迎に忙しきこと、是なり。第四は社會的原

六三　露西亞、北部亞細亞、席卷せらるる往々文明の使徒を以て自ら任ずる歐人が善意若くは惡意の植民地に於ける人と土人との紛爭、往々基督の起す福音の普及を以て敎の辭と音せらる。

六四　歐洲文明の米國の新天地に於けるは、其適例なり。

六五　Depopulation.

六六　米國白人の人口率は極めて低く、凡そ白人殆ど佛國に類す。移住するや、其の米國に住するや、兒及生長すること、指のれくなること、及これくなること、何如なる國の有事と、通例なる問はず、而して黑人の稱せらるる人口率は頗る高し。

六七　佛國は近年往々已に人口の積極的減少あり、一九〇九年四月一日より九月三十日に至る半年間の減少二、八二〇人、一年一ケ年間の減少一、一九一、六四六人に達す。

六八　濠洲の如き、其既墾地が人口を養し得るは今の倍に達し、拘十倍にしも得べきに、人口減衰の現象既に、人口減衰の國立人口調査會の調査に據り、今より二十五年後には人口は積極的減少に向ふへしといふ。

六九　獨逸の如きも都會生活は既に此事象の漸く顯著なるものあり

七〇　Neo-Malthusinism

七一　Arsènes Dumont: La Dépopulation et la Civilization.
Commander: The American Idea.?
等枚擧に遑あらず。

因にして、道德生活の低下、殊に其國の大都を外人の遊樂場とすること、勞働忌避の消極經濟の流行、諸子分配より財產格の低下を厭はしむるが如き相續法の不利益、男女の結合及其間の敬愛の虛衒、宗敎上の禁欲生活制、家庭的求心生活漸く廢れて世間的遠心生活に赴くこと、是なり。之[七三]を要するに人口減衰の社會的原因は、家の不發達若くは衰廢、及男女の社會的地位關係の其處を得ざるに坐し、これが爲には女子敎育の其方途を失すること與りて大に力ありとす。

優生學は[七四]近時の樹立に係り、本來遺傳の理法に本づき、之を利用して人の心身兩面の屬性の改良進步を圖るを旨とせるが、動もすれば劣惡個體の淘汰を以て同樣の目的を達せむとするに流る。人種の優良を計るは固より可なるも、唯その人口を損するが一種の損失、一種の犧牲なるに注意せざる可からず。凡そ人意的に人口を減損するの場合は、一に惡疾を子孫に遺傳するの虞あるを以て禁婚若くは去勢すべしとする事、二に父母が其子の鞠養及敎育の困難を豫想し、之を理由として出產を制遏するを是認する事、三に社會經濟に於ける生

七三　佛國は一九〇一年此種の委員會を設けて此に從事せしが、其效果擧らずして弛廢し、更に一九一二年之を新にせり。濠洲は一九〇五年此委員會を設け、其成績は Beale: Racial Decay. 1912. となりて現れたり。

七三　不正なき政治は可能なるも、設計的政治に短なる Clonest but not constructive) 代議制を以て亦人口減衰の原因の一に數へ、印度土人及南阿黑人と同地白人との比較の實例に鑑みて直接に減衰の一因に數ふる學者もあり、攻究を要する要事たらずとせず。
W. Rose Adams: The Growth of Nationp. 191-5.

七四　Eugenics優生學の著書、其主なるもの二三を掲ぐれば左の如し。
F. Galton: Eugenics: Its Definition, Scope, and Aims. Studies in Eugenics. 等の論文(Am. J. o. Sociology.)
D. Weatham: An Introduction to Eugenics. 1912.
J. Rutgers: Rassenverbesserung.
M. Aderton and K. Pearson: The Relative Strength of Nurture and Nature. 1915.
C. A. Davenport: Heredity in Relation to Eugenics! 1911.
Mary Dale: The Meaning of Eugenics. 1912.
C. W. Saleeby: The Progress of Eugenics. 1914.

計の困難の事實を認め、之を理由として人口の增加を制限せむとする事、四に社會の發達は人口の量に在らずして其質に存すといふを理由として人口を制限する事、是なり。右の中、幾分正當の理由として認むべきは第一のみ、鞠養敎育の經濟的困難は必ずしも其不成績を伴はず。且事實は尤も數、父母の個人主義的奢侈安逸が口を鞠養敎育の困難に藉す。人口の量を制限するによりて達せらるるが如き質の完美は物質的完美のみ、理想的完美を距ること遠きもの、且量の衰微に於ける質の完美は亦消極的衰颯を免れず。殊に生計の困難は、事實人口の增加の制限となり居らず、此事、家にも、國にも、極めて著明なり、人口を制限するものは貧に在らずして富に存す、生計の困難に在らずして奢侈淫蕩に存す。之を要するに、人口を損せざる範圍に於ける優生主義は之を取るべく、斯かる主義の實現方法の研究に其問題を限るに於いて、優生學は社會學人種學生物學の一應用科學として存在の理由を保有するを得べし。

丙、自然移動率と移住率との消長は文明の恒常性及發

展性に影響す。人口率一定なりとするも、自然移動率高くして移住率低きは、民族發展の大なるを表し、移住率の高きは該社會が僅に外來の來住者によりて其人口を維持し發達しつゝあるを表す、此の如きは社會文明の自然發達性の不完全を表し、歴史的渾一性の不充分なるの明徴にして、其文明の性質は變轉不定を致す。[七五]

丁、人口移動の形式は、諸種の文明事象及民族性格と表裏を相做す。人口移動の形式の主なるものは、第一に出生に關する事項にして、公生と私生、死産、墮胎及避妊、出生の月次及年度、父母の年齢、是なり。第二に死亡に關する事項にして、病死及變死、殺人、自殺、死亡の月次及年度、病死の病種、是なり。第三に婚姻に關する事項にして、公婚及私婚、

七五　米國の國情、其文明の性質の各十年紀に已に著大なる變遷を見る、以て適例とすべし。

離婚、婚姻の早晩、婚姻の月次及年度、婚姻者の人種、國籍、宗教、教育に關する事態、婚姻と出生との比率、是なり。第四に人口に關する事項にして、年齢別人口の比例、[七六]性別人口の比例、[七七]體格統計、[七八]教育統計、宗教統計、是なり。第五に移住に關する事項にして、來住と往住との數及比、移住者の國籍、人種、年齢及性、既婚者と未婚者との數及比、一時移住者、歸化者及永住意志者の區別、教育宗教に關する事態、是なり。是等各般の事項は、皆社會事象及民族性格と、或は能規たり或は所規たるもの、輕輕の看を做す可からず。

七六　こは早熟晩熟早老晩老の重大なる表象なり女の長命なるは女權を意味す。

七七　女の多きは淫蕩、柔弱の多きは多妻を意味し、男の多きは尚武、多夫を意味し、女の多きは女權を意味す。

七八　女の男よりも大に體格よきは女權を意味す。

人に關する事項に對し、天然に關する事項にして文明を規定するもの種種あり、學者頗る既に之を論究し、[七九]近時又人文地理學、人間地理學の稱呼を聞く。[八〇]文明は社會の自個實現なれば、社會の主要素、人の文

七九　Buckle: History of Civilization in England. Ratzel: Politische Geographie. Anthropogeo-graphie.

八〇　Brunes: Géographie humaine.

明を規定するは較、直接、助要素たる天然の規定は較、間接なり。

第六、地積は文明の規模を規定す。

地積は純然たる量的事項たるに於いて人口に匹似す、地積の小なるは社會文明の規模を大にする所以に非ず。[八一] 但し地積の大小は天然の有限に坐すること極めて罕なり、天然の絶對有限は唯全地球を打ちて一大社會と成し、而して他の天體との交通の不可能なるに於いて存するのみ、地積の自然的限定は要するに地相又地勢に存す。

國の地積は、近時益、擴大す。されど交通の發達、國際に於ける政治經濟軍事其他事項の交渉互關の密接に赴けるは、更に著き事態にして、國境の、文明の規模を規定する、其效較、衰ふ。而も文明の細節の、各國社會の特性に關する點は、依然として國境に規定せらる。[八二]

第七、地質は四項を以て文明を規定す。

甲、地味の肥瘠は牧畜農耕に影響す。地味瘠薄なるときは遊牧群も其處に發生するを得ず、遊牧群、其偶、占め得たる地味の良好なるや、牧畜より農耕、層層定住的社會に進む。農耕社會は文明の固定性を致すの傾向を有し、遠く外社會と交通貿易を成すの風に乏しく、偶、之あるも亦唯受動的なるを以て、民風は單調素朴に赴く。地味の天惠大ならざるや、衣食給せず、猙獰殺伐の氣風を生じ、其文明は戰伐に長し、外展的にして固定的ならず。次に地味の特色は亦特殊の規定的效果を生ず。[八三]

乙、礦物の生産は原始經濟運營に於ける社會民族に影

八一　希臘文明と支那文明とに相反する事例を看取すべし。

八二　歐西文明の裏、おのづから佛蘭西文明、獨逸文明、伊太利文明あるに徵すべし。

八三　水田と陸田、米と麥、牧畜と山林業との光との類に徵すべし。

響すること大ならず、唯單簡なる器具の材料の供給に於いて聊か影響あるのみ、工業の萠芽を見るに至りて漸く著明なる規定的效果を呈し來る。[八四]

丙、岩石の性質より河流海水の地質學的作用に及ぼす影響は著し。溶解性の岩石と不溶解性の岩石との差は、河流の水質に影響し、地味の補充に於ける有效無效の別を現し、海水の浸蝕を受くると否との別を生ず。而して其長時の效果は、地相又地勢の變化となりて現る。

丁、岩石の性質の常時の效果を衆原由の主要なる一として、風景の品等差異あり、こは民衆の生活及心事に影響し、美術の社會統制の始源を供し、又間接に美術向來の發達及其性質を規定す。

八四　金屬寶玉の大に殊に多少石炭石油の産出ある外、上述の如く社會の富の運命に影響すること大なり。以上の如く社會の富の大なる利益が美術的效果に以て美術的效果に關係なるが如き例證亦少からず。

第八、地相は三項を以て文明を規定す。

甲、高低關係、卽ち地面高低の差等によりて、地面形狀の參差錯雜を生じ、三目の效果を成す。一に地域の自然的區劃は生ず。廣濶平衍なる地相に在りては、社會の統一若くは擴大を妨ぐる天然の制限なきが爲に、單一大規模なる社會を生じ、隨うて文明の規模を大ならしむ。山嶽丘陵の起伏ありて、爲に土地が自然に小區域に分劃せらるる地相にては、或は各小地域に各小社會の起るあり、或は衆小區域を通じて一社會を成し、其各部の間に異同分化を生じて文明の開展に種種の影響を生ずるあり。二に民族の心性に影響す。[八五]三に尤も交通の發達に影響す、殊に原始社會生活に在りて著し。地面の高低起伏の太甚しきは交通

八五　露西亞の如き、一望際涯なき國土に在りては、人千里の遠遊なし、而して雲山萬疊、俯仰斷腸の念なく、冷々淡々たる丘陵重疊、錯雜相連るに、偏小なる地域は、往々胸襟偏小、小慧小巧を尚ぶ。

の發達を害し、文明の發展を妨ぐ。

乙、水流關係は地相の高低より來る著大なる事項の一なり。古來大なる社會及其文明は大なる河流に沿うて起れりといふ、水流關係の規定は著きものあり。水流は、一に概して農業に恰適なる地味を補成し、原始文明の時代、夙に特に人口の密なる聚落を成すの原因たり。二に水流は極めて便利なる交通路と交通域とを供す、水流に沿うて行止するは、人工の大交通路を有せざる古代民族には殊に自然なり、且流域は直に天然の地域を劃す。三に水流は海洋に出づるの通路を供す、文明の進路、民族發展の徑路は、一たび海洋に出づるによりて一大時期を劃す。四に水流は其自個に於いて多くの物資の供給者たり、魚介、流木、水、砂石は其尤たり。五に水流關係と高低關係との合成事象として瀑布あり、其近世工業に動力を供給するは殆と礦産物を凌ぐの勢あり。

丙、海陸關係は地相の規定の尤も大規模なるものたり、其主なる者凡そ五目。文明と海洋との關係其一なり、海洋は世界に於ける極めて大規模なる交通路たり、交通域たり、而して其斯く利用せらるるは殆ど原始民族よりして既に然り、貿易風及潮流は、殊に自然的交通路を夙に洋上に開きて、此交通域内の人類をして、企圖なしに交通を開かしめき、此交通域の區劃は海岸なり。海洋は又其自個幾多の産物を供す。文明と海島との關係其二なり、海島は四面海を環らし、海洋交通の驛站たり、概して地域の狹小な

るより、自發の文明は絶無若くは小規模なるも、外來文明を攝受し且之を擴衍宣傳するが爲に海洋をして其任務を全うせしむるに與ること大なり。文明と海岸線との關係其三なり。海岸線は海陸の交叉點なるが、此海陸の境界線の長短は、陸地をして世界の大交通域に接壤せしむる所以の關鍵なるが故に、文明の攝受及擴衍に於いて海岸線の長きは利便大なり、海岸線の參差錯綜、犬牙を成せるは、陸の地域に比して海岸線の太だ長きを意味し、其利便尤も大なり。其他又沿海漁業よりする海洋の産物を資用するの利便は、多く海岸線の長短に規定せらる。港灣の多少及形狀其四なり、港灣の有無は交通路としての海洋の價値に影響す、この事原始生活には必ずしも著からざるも、社會の進運に連れて直に其重要を激增し來る。[八六] 大陸地點の海洋に對する距離の關係其五なり、此距離の大なるに隨ひ、地點の大陸的性質は增進す、原始社會經濟に於ける採取時代が或は漁業を現し或は狩獵を現するは此規定の一適例なり、生活方法の斯かる差異は原始民族の心性に影響し原始文明を規定す、海洋習氣と山陸習氣との對比は其著き者。近時に至るまで、交通路たるの價値に於いて大陸は遙に海洋に劣れり、故に大陸の奥區に在りては、文明は自發的なる者の外、他より攝受の利便は殆ど之なかりき、近時此事態は一變せるも、猶大陸交通と海洋交通とには各特殊の短長あるを免れず、隨うて海陸距離の規定的效果は到底消滅に向はず。

八六　港灣の修築は社會大に進むに於いて行はるるも、こは水流に對する運河と一般、文明の能規の論には有力ならず。

第九、地位は別異と變遷とを以て文明を規定す。

社會の存立するや、地球上其地位に別異あり、又變遷あり。[八七]凡そ同一の地相、地質、地積を具ふる社會も、地位の別異と變遷とによりて其存立及發達に差等を生ず。文明の發生は其地位によりて便否あり、文明の發達擴衍は亦其地位によりて便否あり。地位は衆社會文明相互の關係事項にして、其規定的效果は主として外社會との關係の變動に倚繫す。

八七　東半球に在ると西半球に在ると、東亞國とすると歐國とすると、西地位の如き自然的別異には地位の如き大洋の鎖鑰の變動の見地なり。海の西洋の弊の爲に、地位の歷史的變遷なり。

第十、氣候は六事六項に於いて文明を規定す。

氣候の差等は之を六事に約すべし、寒暑、乾濕、雨量、降雪、風、及晝夜の長さ是なり。氣候は一に民族の體格に影響し、就中體質卽强健力に影響すること大なり。二に民族の性格に影響す、氣候の差等ある兩處に棲息する同一民族は久しうして頗る性格の差異を生ず。三に犯罪に影響す。四に宗教に影響す、宗教は、俗教より自然に發達するに於けるも、將に豫言者の創設に係るも、教諦、宗儀、直接に氣候の規定を受け、更に其成立に必須なる傳播宣布に於いて亦氣候の規定を受く。

某々の氣候に棲息する民族には、某種の宗教は恰適するも、某種の宗教は恰適せざるの關係あり、爲に高尙幽玄なる宗教教諦を創唱するも、唯一人の哲學者たるに止まりて、宗教の開祖たるを得ざる運命に了る者亦少からず。世界に於ける大宗教の起れる、大抵熱帶若くは准熱帶の國土に於いてせるの事實は、頗る此間の關係を表す。宗教の傳播が季節に關係あるも亦著明なり。

五に生物界と人の勞働功程とに於いて經濟に影響す。六

に風俗に影響す、衣食住、燕遊社交に至る氣候の影響は小ならず。斯くて氣候の文明を規定するや、主として間接、幾分は直接に於いてす。

第十一、生物界は若干複雜の關係にて文明を規定す。

地上に成長する生物界は多く上述諸種の規定事項の規定に由れる所産にして、復翻りて文明の規定となる。生物界は、人間に衣食住、生活の原資用の大部を供す、生物界の異同は這供給の多寡及品目の異同を生ず。人間社會の原始的なるや、生物界は唯天然の存立なるのみ、人間社會は全然所動的に之を享受し之に規定せらる。社會生活漸く進むや、生物界亦人意の司配を容るるに至り、生物の人爲的繁殖漸く生ず、農耕、殖林、家畜、昆蟲の飼養等卽ち是なり。此變遷の際に於いて、生物界の文明を規定するは、絶對より相對に進む。

以上文明の內關規定を概觀し了る。

第十二、世界の形勢は外より文明を規定す。

文明に關して世界の形勢を觀ずるに、一特定文明は、或は當時の世界に於ける唯一の文明として存立し、或は衆文明の對立駢存に於いて存立す。凡そ文明の孤立するや、其發達は全然內部よりし、其性質は、一定の樣式典型を固持する、個性的特色に富む。文明の駢立するや、其相互の影響は到底絶對に免るべからずして、性質の錯綜より、個性は頗る消磨せらるるを免れず、而も資料の急速なる增加を見るの可能なるより、發達の迅速は寧ろ此際に見るべ

く、文明の孤立に在りては、外より攝受の機會を有せざるが爲に、發達の遲遲たるは免れ難き所とす。

文明の駢立は、又競爭によりて發達を著大にす。但し競爭は直に文明其者の所業に非ずして、文明の寓する社會人衆の努力に存す。文明の孤立するや斯事の行はるる機會なし。文明競爭は二面に效果す、一は總體的競爭なり、文明の發達に於ける速度の二要素の中、速に於ける效果は玆に將來せらる。二は部分的競爭なり、文明の各種形象及其性質各個に於ける競爭にして、互に妍醜長短を比照して益進捗を企圖す、速度に於ける方向の上の效果は是なり。斯くして競爭は文明の發達に於ける速度を完全なる方式に於いて規定するの效果を成す。

八八 支那文明の朝鮮に於ける、羅馬文明の各州縣地方に於ける、特に其實質的發展を致せるを見ず。

文明の擴衍に關しては、文明の孤立に在りて、文明は何の障碍なく道展し得るも、衆文明の駢立するや、彼是相碍げ、充分の進展に便ならず。凡そ文明の擴衍は往往新なる規定に遭遇して、爲に文明の變態を來し、時に文明の發達を促すも、多くは其退歩を致す。八八

文明に關する世界の形勢といふの外、一般的世界の形勢、亦文明の規定として考察を要す。

國家社會の對立及其關係は文明を規定すること大なり。衆國社會の對立するや、民族の利害關係は國家の畛域の爲に痛切に感ぜられ、協同若くは反撥の關係は年所を遂うて次第に複雜を加へ、其間また關係の變遷あり、加之國際關係の平和的なると好戰的なるとに隨うて、文明の

調子は多大の影響を受く。蓋し國家を單位とする人間社會間の競爭は尤も深く且尤も規模の大なるものにして、其文明に影響する亦尤も深く且大なるものなきを得ず。且此規定は、社會の原始的より開明的に進むに隨ひ益〻其效果を大にす。[八九]

[八九] 希臘列國の對峙、支那春秋戰國の競うて威武を振へるに、各其文明に特殊の色彩を以て徵すべし。

世界の形勢が新なる社會民族の發展に向うて面目を一新するの場合の如きは、尤も文明に對する直接又間接の影響の至大なるを見るの時期とす、蓋し此時期に際しては、人心の一新あり、活動の激進あり、主觀客觀、內外兩面、相竢ちて文明に新なる方向と新なる速さとを與ふるを致す。

日本民族が其太初大八洲國を發見せし場合の如き、建國の理想、文明發展の運命希望、實に洋洋たり。支那に在りて、堯舜を經、禹の水を治め了りて新に中原の檢測經營を始めたる、亦頗る洋洋の觀あり。歐西に於ける歷山遠征は文明の一大時期を劃し、馬哈麥及其敎徒が地を地中海の南岸、從來未だ多くの繁昌する民族社會の史蹟を印せざりし廣邈たる國土に卜して其新なる發展の途に上りしとき、オットマン土耳其人が西亞細亞を席卷して更に歐洲に侵入を企てしとき、頗る盲目の嫌ありしも聖瑩回復の爲に歐洲の衆民族が西亞細亞の新奇なる舞臺に活動を試みしとき、皆これ文明の一新時期なりしなり殊にその著きは、中世の終、近世の始、印度洋及大西洋に於ける航海の發達より歐西民族が新に活動の地を發見せしとき、印度に於いて、濠洲に於いて、西比利亞、支那に於いて、卽ち東洋に於いて、近時歐西民族が新なる活躍經綸の地面を見出ししとき、日本民族が歐亞の大世界に於いて新なる民族發展の舞臺を見出したる最近五十年の史期の如き、尤も大規模にして又的確なる證例事實を供するものとす。

世界の形勢沈滯不動なるときは文明の一頓不振を來

し、而して文明の萎靡枯衰に赴くを常とす。平和の永續するとき社會人心の腐敗を惹き易しといふは、此場合を指すこと多し。平和は平和的文明事項の催進に便に、戰爭は戰爭的文明事項の催進に便なるが、一般には、世運の進まざるや乙に由る文明の發達多く、世運進みては甲に由るを多しとす、唯平和の永續は多く世界の形勢の沈滯不動に坐すること多く、而して是れ實に文明に於ける危機たり、所謂文恬武熙の世況是なり。

世界の形勢紛擾亂雜の狀態に在るとき、文明は一時蟄伏の狀に陷るを常とす、其間社會としてよりも寧ろ個人的實力の行使活動の盛なるを見、乃ち漸次文明の新動力を生じ、其統整せらるる、遂に新なる文明活動の中心を生じて、茲に文明の復活を見る。[九〇]

九〇　此事後節文明の力を說くに於いて詳を加ふ。

以上一般に世界の形勢が文明を規定する所以を觀了る、之に前述世界に於ける文明の形勢が文明を規定する所以の說を加ふる、以て時を同じうして世界の形勢が文明を規定する所以を觀るに足るべし、剩る所の問題は、時を異にして世界文明の形勢が如何に或る特定の文明に影響するかに在り。

凡そ先蹤たる文明は、適當の時期に於いて後出の文明に影響す、其方式は、或は傳承、或は變態あり。傳承に在りては、先蹤文明の內容外形が其まゝ後出文明の一部として現る、是れ後出文明の幼稚にして、未だ豐富なる內容、確實なる外形を有せざるに於いて起る所の現象なり。變態は、先蹤文明が後出文明に影響して唯若干の變態を與ふるに止まるもの、後出文明の發達頗る著く、內容も稍豐富、外

形、樣式も稍確實鞏固なるに於いて見る所とす。變態は力の平行邊形理法に類す。[九一]所謂適當なる時期とは、後出文明が相當の發達を遂げて、先蹤文明を咀嚼し敬重するを能くする場合是なり。先蹤文明、一たび活動の影を收むるや、自ら進みて後出文明に影響するを能くせず、必ず後出文明の進みて之を取るを須つもの、而して是れ後出文明に於ける一定の發達を豫想す。[九二]凡そ文明の原始的發生を除くの外、野蠻や、草昧や、皆既に文明の初程を以て目すべく、そが傳承若くは變態の方法によりて後世の文明に影響するは必然なり。

世界形勢の變動は、往往先蹤及後出兩文明を觸接融合の狀態に致すに與りて力あり、而して異時文明の影響は、亦是れ世界の形勢の文明に對する一規定なりとす。

世界の形勢が文明を規定する、頗る多端に亙れども、大綱は約して右の如し、而して文明の規定の取扱は茲に了る。

第五節　文明の機關

文明の機關は、先づ社會文明の發生發達を可能にする所の者を意味し、次に此作業を幇助する所の者を意味す。文明の機關は、文明の手段たる事項を意味し、次に又文明の成績たる事項を意味す。蓋し文明は社會の體制的自個實現に外ならざるを以て社會の衆運營及これが機關は文明に與らざる者殆ど罕なれども、就中正面より此を成す所の運營機關あり、又側面より此に與る所の運營機關

[九一] 歐西文明が東洋の舊文明に接せしめ、其變態の例に接せしめて、其場合は希臘文明の例に接せしめて、其場合は希臘文明の傳承の例を供す

[九二] 希臘文明は恒に存して、而も文藝復興に至るまでこれが影響を及ぼす大なりしは、歐西文明が耶蘇教文明の幼稚なる軍士に及ぼしたる影響の如し。文明の幼稚なる軍士に及ぼしたる影響の如し。文明の幼稚なる軍士に及ぼしたる影響の如し。

あり。文明は社會の自個實現なるを以て、實現の爲に經由する所の運營あり、實現の效果を聚積する機關あり。是故に文明の機關は實地頗る駁雜なる內容を有す。

文明の機關は之を三類に大別す、第一類、宗教、美術、學術、教育は正面的機關の較、判明なる者、第二類、風俗慣習、儀式法制、道德は其較、不判明なる者、而して第三類、經濟、政治及社會組織は側面的機關なりとす。判明なる者は漸く判明なる機關を具ふるに進み、不判明なる者は漸く心意上の判明を加ふるに進む。[九三]

第一。宗教が文明の機關たるは五項に由る。[九四]一に信仰は自覺を促し、人心の作用の强き發現は社會の自個實現の根抵を供す。二に精醇、高尙善美なる信條教諦を有する民族は、之を通じて文明の實現を成すに成功す。三に教會は宗教の中心たると同時に社會的精神的交通及協同作業の中樞となり、宗教組合は更に亦數、美術文藝工業活動の中心を供す。四に宗教の本質は絕對不平等關係に存し、不平等關係は進步を誘致す。五に宗教は文明の寄託たる諸種の事項を或は包含し或は附帶す。[九五]

第二。美術が文明の機關たるは七項に由る。一に人造美術は一面文明の成績たり、一面又文明の手段として司配的供用を受くるに適す。二に美術は特定文明の特色の顯現にして更に其種子を供す。美術は文明の華にして且實なり。三に美術の大なる發達を遂ぐるは社會生活の必要衝動の充分滿足を得たる後に在り、故に美術の隆興は文

九三　歐西の學者、文明の機關を稽、細說せるは George Harris: Civilization considered as a Science. London, 1861 なり。謂へらく、文明なる進步せしむるものは一に國民教育なり、二に國民的宗教なり、三に國民的勢力なり、制度なり、教化的制度なり、これ大に甲及乙の制度なり、丙及丁の學術機關、學術物館、演劇館、四民的に及ぶ美興行術館なり、五のむ美術なり、六に出版なり、七に紀念及祭儀なり、八に自習的なる學問なり、九に國民的なる學問なり、十に交通的なる學問なり、十九にこれら國際的なる學問なり、雜駁なる內容を有する。

九四　宗教、美術、風俗慣習、禮儀、言語、機關、官吏、等の關係、輕視、力、者、風、化、の關係、主、的、權、政、法、律、治、影、響、及、表、儀、式、名、譽、德、道、德、主、道、德、主、義、者、なる、ものは、本書第三篇、第二章、參照する。

九五　美術、禮儀の如きは、包含事項の例にして、傳說の如きは、附帶事項の例なり。

明發達の項點に近きを表示すると共に、生活の必要衝動に對する顧慮の減耗の影響は或は文明發達の降下を意味す。四に美術の個人的職能は、繫縛より個人を解脫せしめて其實現的能力を增進し、以て間接に社會の自個實現を進捗す。五に美術の社會的職能は敎化を進捗して較、直接に社會の自個實現を進捗す。六に美術は其自個が實に社會の自個實現の直接なる一部たり。美術は當代該社會の文明的造詣の尺度に類す。七に美術は特殊の判明なる機關を有すること罕にして、直に社會其者を以て機關と爲す。

第三。學術が文明の機關となるは四項に存す。一に學術は人心の活動、殊に其內容の大部分にして且方向の決定者たる智的活動を盛大活潑にし、以て社會人衆活動の源泉を隆にす。二に學術は人心の活動の精緻複雜を增進す。三に學術は技術工藝の先驅たり、利用厚生の本源たり、乃ち實地生活の改良を促進す。四に學術は更に宗敎及美術の發達に參與して以て間接に文明の機關たるの作用を成す。

第四。原始文明に微にして、發達せる文明に顯著なる文明機關は學術なり、乃ち此進化的なる學術を首腦とせる敎化運營は、亦進化的なる一の新なる特殊機關に由りて實現せられたるを得ず。敎育が近世に於いて敎化運營の中樞を以て擬せらるる所以亦此に存す。敎育の特長は、一に學術の學習に在り、二に個人的訓錬に長するに在り、三